

徳島県総合計画審議会「若者クリエイト部会」会議録

I 日 時 平成26年7月23日（水）15:00～18:05

II 場 所 県庁10階 中会議室

III 出席者（敬称略）

【委員】10名中 9名出席

青木正繁（部会長）、福島明子（副部会長）、
蔭山洋子、川眞田彩、樋泉聡子、池添純子、
岡田育大、竹内祐介、村松享

【オブザーバー】10名中 7名出席

板東純平、高木和久、榊原陽子、山下哲央、
小原和浩、松本秀明、石井里奈

【県】

政策創造部副部長、総合政策課長 ほか

IV 次 第

1 開 会

2 議 事

（1）県民からの意見聴取状況について

（2）研究発表「新たな総合計画策定に向けて～若者の視点～」

（3）その他

3 閉 会

《配付資料》

資料1 Facebookページ「みんなで創る徳島県」への投稿コメント一覧

資料2 県内高校生アンケート調査結果

資料3 大学生アンケート調査結果

資料4 グループ研究報告書

V 意見交換

(事務局)

今日出席予定の方は全員そろいましたので、ただ今から、「若者クリエイト部会」を開催いたします。

議事に入る前に、県の人事異動がございましたので御紹介させていただきます。私どもの政策創造部の副部長に7月12日付けで財務省から出向となりました、吉田課題解決統括監兼政策創造部副部長です。

(政策創造部副部長)

皆さん、よろしくお願いいたします。

(事務局)

前任の七條につきましては、副部長の兼務が取れまして、県立総合大学校の本部長となっておりますので御紹介させていただきます。

本日は、近森委員さんと、オブザーバーの島さん、蔵本さん、釋子さんが都合により欠席となっております。

この後の議事進行につきましては、青木部会長、よろしくお願いいたします。

(青木部会長)

それでは、クリエイト部会の皆さん、お暑い中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。今日は大変楽しみにしていた研究発表という大きな演題等がございますので、是非皆さん、いつものように気軽に、どうぞよろしく願いしたいと思います。

それでは早速、議事を進行させていただきます、よろしくお願いいたします。

それでは本日の進行ですが、まずは事務局の方から、県民からの意見聴取状況について御説明をいただきまして、続きまして、前回皆さんにお願いいたしました、現行計画の基本目標1「にぎわい感動とくしま」から、基本目標7「宝の島・創造とくしま」についてのグループ研究の成果について、基本目標順に、各グループ代表者もしくはそのグループで決められた発表者から、10分を持ち時間として発表をしていただきたいと思います。

そして、各グループの発表終了ごとに、その基本目標に関する意見交換を、意見聴取関係も含めお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それではまず、県民からの意見聴取状況について、事務局から御説明をお願いしたいと思っております。よろしくお願いいたします。

(事務局)

それでは、県民の皆様からの意見聴取の状況についてということで、順次御説明をいたします。時間もございませんので、手短にさせていただきます。

意見聴取でございますが、皆様に御協力をお願いいたしました、SNS、フェイスブックによる意見募集を5月からやっておりますけれども、そのほか、県のホームページ、パブリックコメントシステムで、5月1日から6月末まで行ったところでございます。

そのほか、6月から順次県内の高校生、あるいは県内外の大学生ということでアンケート調査をさせていただきます。また、知事が県民の皆様と直接“徳島の未来”を語る「宝の島・徳島『わくわくトーク』」ということで、6月から東部、南部、西部の3地域で今開催中でございます。

こういった様々な手法で御意見をお伺いしているところでございまして、このうち、若者からの意見ということで、当部会におきましては中心的に議論いただきたいということで、今回は事前に送付しております、資料1から3、フェイスブック、あと、県内外の高校生、大学生アンケート、それぞれの内容について御説明をさせていただきます。

まず、資料1、こちらの横置きフェイスブック、「みんなで創る徳島県」の意見募集状況でございます。コメント一覧ということで作っておりますが、この詳細、内容については割愛をさせていただきますけれども、四つのお題、そのほかを含めまして、総コメントが今朝方までで、このペーパーは75件ですが、2件追加いただきまして、今77件ということになっております。あと「いいね!」につきましては256件という状況でございますので御紹介しておきます。

次に、資料2の「徳島県に関する県内高校生アンケート」というのを御覧いただきたいと思っております。

こちらにつきましては、県立高校の1,436人を抽出いたしまして、調査いたしました結果でございます。

概略を追いますと、まず1ページ目を御覧いただきますと、「(1)徳島県のイメージについて」というところでございますが、「不便」、「地味」というところが1位、2位という一方で、「暮らしやすい」という意見もございまして、この三つが二桁を超えて

いるというところがございます。

めくっていただきまして、「(2) 徳島県への定住志向について」というところがございますが、「ずっと住みたい」、あるいは「一度は県外へ出ても、徳島に戻って住みたい」というところを合わせますと、計55.6パーセントというところがございます。

これは、今年のお正月に徳島新聞さんが県内の高校2年生へアンケートいたしました。それも同様の問いがあったんですが、それにおきまして、「住みたい」、あるいは「戻って住みたい」というのが47.5パーセントございましたので、割と約半数ぐらいは定住志向があるというトレンドが出てるのかなと考えておるところでございます。

その理由等は省きまして、めくっていただきまして4ページ、5ページでございますが、今の定住志向の裏付けなのかはわかりませんが、例えば、「将来どのようなことを大切に生活したいかについて」というところでも、「家族や友人など身近な人との時間を大事にする」というところが圧倒的に高い数字を出しているというところと、「(8) 将来希望する仕事について」を御覧いただきまして、将来の仕事も、「医療、福祉（保育所含む）」、「教育、学習支援業」、「公務（他に分類されるものを除く）」ということで、比較的地元志向の職が強いのかなというふうにも受け止めているところがございます。

めくっていただきまして6ページ、「(9) 結婚したい時期について」、あるいは「(10) 子どもを持ちたい時期について」でございますが、いずれも「20代後半」、「20代前半」というところが1位、2位というところで、「結婚」につきましては、20代トータルでほぼ80パーセント、「子どもを持ちたい」ということにつきましても、65パーセント程度ということで、高校生につきましては、こういう傾向が現れているというところがございます。

次の7ページですが、「(11) 徳島県の魅力について」ということで、これは、上から「豊かな自然環境」、「阿波おどりをはじめとする豊富な観光資源」、「四国霊場、人形浄瑠璃、藍染めなどの歴史・伝統文化」、「新鮮で豊富な食べ物」といったところが二桁を示しております、トータルで7割というところになっております。

あと、逆に、「(12) 徳島県に足りないものについて」というところですが、「魅力あるイベント、コンサート、スポーツ観戦」というところと、「街の活気」、「通学するための公共交通機関（列車・バス）」、「流行の商品が買える店」というところが上位で、高い数字を出しているところがございます。これもトータル6割弱というところになっ

ております。

めくっていただきまして、「(13) 2050年頃に希望する徳島像について」というところですが、1位は「南海トラフ巨大地震をはじめとする大規模災害への備えが万全となっている」というところが一番高い数字ですが、その次は「四国新幹線が開通し、高速道路が十分整備されている」といったインフラ整備ということになっているところでございます。あと、「田舎にしかない良さを再発見し、その良さを活かして街が活力を取り戻している」等が続いているというところでございます。

以下、自由筆記のところは割愛させていただきまして、続きまして、資料3でございます。「徳島県に関する県内大学生・高等専門学校生アンケート」ということで、県内と県外、トータルで2,626人の調査結果でございます。

県内と県外で問いが違いますので、個別に資料3で説明をさせていただきますが、まず、県内1,618人でございますが、「(3) 出身都道府県」を御覧いただきましたら、「徳島」出身がちょうど半数というかたちのアンケート結果でございます。

めくっていただきまして、「(1) 徳島県のイメージについて」でございますが、1位、2位、3位につきましては、高校生と全く同じ、「不便」、「地味」、一方で「暮らしやすい」ということが高い数字でございまして、さらに4位から6位までは「活気がない」、「あたたかい」、「安全」というのも、順番は若干違いますが、高校生と共通しているというところがございます。このあたりが県内に住んでいる若者のイメージなのかなと感じております。

その下、「(2) 徳島県への定住志向について」でございますが、徳島に「住みたい」という方は3割というところで、県人が半分ということを考えますと、これもある程度トレンドとしては合っているのかなと感じております。

めくっていただきまして、4ページでございます。4ページの「(7) 将来どのようなことを大切に生活したいかについて」。これも先ほどと全く同じように、「家族や友人など身近な人との時間を大事にする」という方が47.5パーセントと、圧倒的に高い数字でございまして、次の、「(8) 将来希望する仕事について」につきましても、「医療、福祉（保育所含む）」、「公務（他に分類されるものを除く）」、「教育、学習支援業」というところは、高校生と変わらないというところがございます。

めくっていただきまして、6ページが「(9) 結婚したい時期について」、「(10) 子どもを持ちたい時期について」というところがございますが、これも「結婚」につつま

しては「20代後半」と「20代前半」が1位、2位で、トータル7割を超えているというところがございます。一方で、「子どもを持ちたい」ということにつきましては、やっぱり大学になると、ある程度現実感もあるのかなというところがございますが、「20代後半」が約半数で高いんですが、「20代前半」につきましては7パーセントということで、トータルで20代が6割弱というところがございます。

7ページ、「(11) 徳島県の魅力について」ですけれども、これが最初の高校生とほぼ順位も含めて数字もぴったりというところで、「豊かな自然環境」、「阿波おどりをはじめとする豊富な観光資源」、「四国霊場、人形浄瑠璃、藍染めなどの歴史・伝統文化」、「新鮮で豊富な食べ物」まで、非常に酷似した結果となっております。

逆に、「(12) 徳島県に足りないものについて」も、上位4位は順番は違いますが、高校生と全く同じ項目が上位を占めているというところで、このあたりははっきりトレンドが現れているのではないかと見ているところがございます。

めくっていただきまして8ページ、「(13) 2050年頃に希望する社会像について」ですが、こちらも、「巨大地震をはじめとする大規模災害への備えが万全となっている」と「高速交通ネットワークが整備され、国内どこへでも短時間での移動が可能となっている」というところが、やはり1位、2位ということで、高校生と酷似しているところがございます。

自由筆記を割愛しまして、以上が県内の大学生というところがございます、最後に「徳島県に関する県外大学生アンケート」ということで、県外の大学生、11ページからですけれども、首都圏と近畿圏の大学に行っております1,008人ということで、うち、「徳島」出身者が1.7パーセント、それで、徳島に行ったことが「ない」方が73パーセントという数字となっております。

めくっていただいて12ページ、「(2) 徳島県のイメージについて」を御覧下さい。徳島県に対するイメージでございますが、「田舎」、「地味」。「田舎」というのは県外のみを選択肢でございます、それが1位になっておるというところがございます。あと、「地味」、「不便」というのは、県内と共通するところで、一方で、「あたたかい」、「美しい」といった好意的なものも、4位、5位となっているところがございます。

次の13ページですが、「(4) 卒業後に住みたい地域について」でございますが、「四国(徳島県)」は1.3パーセントというところ、おそらく出身の方が1.7パーセントということですので、そういった方が中心になっているのではないかと考えており

ます。

めくっていただきまして、14ページが「(6) 2050年頃に希望する社会像について」というところがございますが、こちらにつきましては、「地域の個性を活かしたにぎわいと活力のあるまちづくりができています」が1位ですが、「高速交通ネットワークが整備され、国内どこへでも短時間での移動が可能となっている」が2位というのは、県内と共通かなと思っております。

あと、県内で高校・大学とも1位である「巨大地震をはじめとする大規模災害への備えが万全となっている」が4位で、9.5パーセントとちょっと低めになっておりますのは、逆に言いますと、やはり徳島の方が南海トラフ巨大地震への現実感が強いというところがあるのかなと受け止めるところでございます。最後の自由筆記はまた割愛をさせていただきます。

以上、走り走りで恐縮ですけれども、県民の皆様からの意見、特に若者からの意見という観点でのアンケート調査結果を御紹介させていただきました。よろしく願いいたします。

(青木部会長)

どうもありがとうございました。このSNSを活用した意見聴取は初めての試みということでしたが、皆さんの御協力のおかげで、県内外へのPRなど一定の効果があったのではないかと思います。皆さん、御協力ありがとうございました。

それでは、引き続き進めてまいります。

次に、「研究発表『新たな総合計画策定に向けて～若者の視点～』」についてでございます。それで、今日は配席の方も1班から7班というふうに分けさせていただいておりますので、1班の「にぎわい・感動とくしま」から順番に研究発表をしていただければと思います。では、よろしく願いいたします。

(蔭山委員)

トップバッター、1班「にぎわい班」のプレゼンを始めさせていただきます。

メンバーはリーダーの近森さん、そしてオブザーバーの石井さんと山下さん、そして私、委員の蔭山です。今日は近森さんが都合のために欠席となっております。

それでは、早速ですが、私たちの班は「にぎわい・感動とくしま」という研究テーマ

でしたので、特に重点戦略にとらわれず、「にぎわい」と「交流」といったキーワードを中心に、10年後を見据えて考えてみました。

7月3日の徳島新聞には、「2013年の徳島県内の宿泊者数が225万人で、前年度からの増加率が全国3位の24パーセント増」と載っていました。しかし、増加率は高くても、宿泊者の都道府県別ランキングでは4年連続最下位だそうです。宿泊者数が増えた要因には、イベントの影響、特に「マチ★アソビ」や「とくしまマラソン」の影響が大きいのではないかと思います。

「徳島は素通りされがち」とよく言われますが、時間帯的に日帰りが難しい場合や、二日目もイベントを続けて楽しみたい場合は、必ず宿泊への需要もあり、また宿泊してもらえれば、目的のイベント以外の観光名所にも足を伸ばしてみようという気持ちになり、徳島県全域への交流のひろがりや、観光客の増加にもつながるのではないかと思います。

しかし、現状を見てみますと、県外の方からのイメージは「徳島イコール阿波おどり」、そして、食べものは「徳島ラーメン」ばかりに集中してしまっていて、新たに発信力のある、若い世代に徳島に来て滞在してもらうためには、ちょっとアピールがマンネリ化しているのではないかなと感じています。

そんな徳島にも、たくさんの魅力があります。山・川・海の与える豊かな自然はもちろん言うまでもなく、県都である徳島市も「水都とくしま」として、川を生かしたまちづくりを官・産・学・民が一体となってい、成果を挙げています。

また、5年前、2009年に始まった「マチ★アソビ」は、秋葉原からのツアーバスが出ているということもありまして、毎回1万人以上の観光客が遊びに来ていて、声優さんの声が流れる「眉山ロープウェイ」の利用者数は前年より20パーセント増になったこともあるそうです。

そして、2010年にスタートしました「徳島LEDアートフェスティバル」もあります。LEDアートフェスティバルについては、この後、もう少し詳しくお話ししていこうと思います。

ここ10年を振り返ってみても、県民参加型の、そして、県外から観光客の呼べるイベントが随分増えてきているなというふうに感じます。

しかし、先ほど御紹介したのは成功例ですが、そのほかにも自治体が主催のイベントはたくさんあります。しかしPRが足りず、「そんなのやっていたの知らなかった」

とか、「行ってみただけ、人が全然いなくて結局身内の集まりだった」なんていうイベントも数多くありますね。

情報自体も、こちらから調べようとしなければ、なかなか入ってこないものも少なくありません。また、広くPRしていくのがちょっと苦手な、シャイな徳島県民気質の表れなのかもしれません。

徳島に「にぎわい」、「交流」をもたらすためにも、私たちも含めた徳島県人みんなで、徳島県を盛り上げ、オープンな心で、県外や、また国外の方を迎え入れていきたいものです。

以上のことを踏まえまして、10年後を見据えて、「こんな徳島いいよね」という班のメンバーから寄せられた様々なアイデアがありましたので、四つの提案としてまとめてみました。

1. 10年後に阿波おどり以上に有名になるイベントをつくる
2. 部門に特化した商店街をつくり活気を取り戻す
3. 意外と穴場の「アスティとくしま」を巻き込んでの水辺環境の創出
& 観客に足を延ばして観光してもらう
4. 四国観光特区の制定・・・徳島の特色を活かしつつ県の垣根を越えた観光戦略

以上の4点です。

まず一つ目の提案、「阿波おどり」、そして、「マチ★アソビ」、「とくしまマラソン」に匹敵するような、いやそれ以上に全国的に徳島が注目されるようなイベントをつくっていくのはどうかという意見がありました。一番の候補ですが、先ほどお話に出ました、LEDアートフェスティバルの拡大版です。LEDアートフェスティバルは、まだ2回しか開催されていないので、これからどんどん発展していくイベントだと考えました。

「たくさんLEDが徳島産だよ」、「LEDイコール徳島県ブランド」と、全国的にアピールするためには、西日本で一番有名になった三重県の「なばなの里」ほどの規模はなかなか難しいかもしれませんが、規模を拡大し、また期間やルートに工夫をしてみてもどうでしょうか。

作品はもちろん夜鑑賞しますので、宿泊客の増加につながるのではないかと思います。県内企業では、車のバックライトやテレビモニターの規格に少しでも合わないLEDで、廃棄処分されているものも多いみたいです。協力が得られるのなら、有効活用できればいいのかなというふうに思います。

続いて、2番目の提案ですが、商店街や通りの特色がない。シャッター街にしたまま置いておこならば、自治体の方に間に入っていただいて、若者に安くテナントを借りてもらい、徳島市中心部にもう少し活気が戻ってもよいのではないかと、という意見が多くありました。

この通りはアニメの店が集まる。この通りは古着屋が集まる。また、この通りは家具といった感じで、一軒では魅力的に感じなくても、集まることによって生まれる魅力があるはずです。

「自分たちで起業したい」、「自分の店を持ってみたい」という夢を持つ若者も非常に多いと思います。きっかけがあれば、そこに似たようなジャンルの出店が相次ぎ、中心部にもにぎわいが戻り、たまたまイベントで県外から来た観光客にとっても、散策していて面白いなと感じる街になるのではないかと思います。

そして、三つ目の提案に入る前に、皆さん、アスティとくしまは県外の音楽ファンにとって、かなり人気のスポットということをお存じでしょうか。キャパシティはおおよそ5千人ですが、普段、何万人規模のコンサートをしているアーティストが、四国で唯一来る会場がこのアスティとくしまなんです。

といいますのも、他の3県には、5千人規模の会場がないんですね。そして人気の秘密は、普段は何万人規模の会場で行っている有名アーティストが、とにかく近くで見られるんです。福山雅治さんも、いつも「近いね、ライブハウス『アスティとくしま』」とMCで言っています。

実は、コンサートの中のMCでお客さんにアンケートをした時に、徳島県外から来た人が半分以上を占めるということも珍しくありません。先月6月だけでも、「ゆず」と「セカイノオワリ」が来県しました。約半分の2千人の観客が県外から来ていると仮定すると、6月だけでも5千人近い方が徳島を訪れたこととなります。また、コンサートは終わる時間が遅いので、宿泊していく方も多と考えられます。

こういった、新しいものや面白いことにアンテナを張っていて、SNSなどを活用する若い世代に、徳島の魅力を体感して帰ってもらうのも、今後、徳島の「交流」の広がりにつながるのではないかなと考えました。

そこで思いついたのが、アスティとくしまの近くから乗れる「水上バス」です。県外から来たファンの方は、バスやタクシーの長蛇の列に並んで帰っています。また、周辺の道路も渋滞しています。渋滞緩和につながり、「徳島にいるんだ」ということを実感

してもらえるアイデアではないでしょうか。

こちらがアスティとくしまも含みます水上ルートの地図です。「ミステル」の桜井さんなども水辺の会場がとても珍しくて、「とてもいい場所にあるね」と毎回MCでおっしゃってくださっていて、お気に入りのようです。ただ、観客の方で、グッズなどを買い求めるために、コンサート開始数時間前には会場に来てグッズを買い、その後、どこにも行くことができず、数時間ひたすら座って時間がくるのを待っているという光景をよく見かけます。せっかく県外から来てくれているのに、とてももったいないなと思います。

そこで、アスティとくしまから「ひょうたん島」まで水上バスを整備し、途中、特色のある停車駅もつくり、そこで乗り降りできるシステムにしてみてもどうでしょうか。コンサートまでの待ち時間、数時間をかけて徳島市の中心部を1周してみるのもよし、川の駅で降りてみて、買い物やお茶を楽しむのもよし、またライブ終了後は、「新町川水際公園」でLEDを楽しんだり、川からホテルに直行なんてできるといいですよ。タクシー的な使い方として、帰りの渋滞緩和に役立つかもしれません。

いろいろクリアする問題があるかと思いますが、そういうことができたら、アスティとくしまを訪れた方が、必ずSNSやツイッターを通して、全国のファンに対し「徳島はこうだったよ」と情報発信してくれることにつながるでしょう。

そして、四つ目の提案は少し目線を変えてみました。以前、「大歩危」に行った時に、徳島空港からは3時間かかりますが、高知空港からは1時間もあれば到着できるという話を現地の方としたことがあります。その時、徳島の観光地を訪れるために、徳島空港を使う必要が必ずしもないことを知りました。

10年後には、高速交通ネットワークが今よりも発達していると予想されます。徳島県だけで完結するのではなく、四国4県、それぞれの強みを活かし補完しあうことで、その結びつきは今以上に強くなるでしょう。そのためにも、今から先を見越した「四国観光特区」を充実させ、県の垣根を越えた観光戦略に取り組み、その中で徳島らしさを出すことが必要ではないでしょうか。

最後になりますが、人口減少化時代を迎え、今後ますます徳島県の人口は減っていくと予想されます。だからこそ、今回のこの発表を通じて、10年後、さらにその先も、「にぎわい」と「交流」のある魅力的な徳島県になってほしいと強く感じました。

以上をもちまして、「にぎわい班」の発表を終わらせていただきます。

(青木部会長)

ありがとうございます。どうぞ御着席ください。

今、1班から「にぎわい・感動とくしま」の発表をいただきました。その発表を踏まえながら、先ほどの意見聴取の関係も含めて自由に討論するというかたちをとりたいと思いますので、皆さん、御意見でも構いませんし、もちろん1班の方も、もうちょっとこういう付け加えも必要だったかなといった御意見でも構いませんので、どうぞ自由に御発言をいただければなと思います。皆さんよろしくお願いいたします。

(岡田委員)

昨日、サンフランシスコの「徳島県人会北カリフォルニア阿波っ子の会」に参加してまいりまして、そこでは「J-POPサミットフェスティバル」というのがありまして、「POP」だったんですけれども、「ポップ街」もある意味「POP街」みたいな・・・。そういう意味では、アニメ専門街というのはいいと思うんですけど、僕もポップ街について考えたときに、はじめ「アニメイト」があって、なんか徳島ラーメンも最近ちょっとずつ入ってきたりしてるので、ラーメン街もありかなとか思ったりもしてました。以上です。

(青木部会長)

どうもありがとうございました。次々、皆さん堅くならず御自由に。小原さん、どうぞ。

(小原オブザーバー)

私、徳島市役所で魅力発信とかを担当してるので、すごいこう「うっ」と、自分ができてないところを突かれた気持ちだったんですけど。アスティとくしまで「水上バス」の話、すごくいいなと思って、今、徳島で「ひょうたん島川の駅ネットワーク構想」といって、いろんなところに川の駅をつくって、周遊船で巡らせるという話が進んでるんですけど、そういうので、アスティまでは船が行って往復できるとかなったら、また新しい魅力ができていいなと思います。

コンサートを見た後に、渋滞で車が並んで「遅いな」とか思いながら帰るより、船に乗って「徳島っていい街だな」と思いながら帰ってもらったら、すごい思い出にもなると思うのでいいなと思いました。

(蔭山委員)

ありがとうございます。

(青木部会長)

福島さん、どうぞ。

(福島副部会長)

私も一番御提案いただいた中で面白かったのが「水上バス」かなと思いました。今、小原さんからもお話があったように、多分、渋滞緩和にもなりますし、魅力を伝えるということにもなるんですが、行きも乗せて行ってほしいなという気がします。ちょっと遠くに置いておいて、「パーク・アンド・ライド」みたいな感じで、こっち側に車を置くスペースをつくっておいてとか、駅前から、駅前まで来た人に乗ってもらおうとかっていうふうに、それを交通の一つ、PRの一つとして使ってくれたら面白いなという気はしました。

このほかに、それプラスで、船舶の免許が取れるような、そこでボートの運転の練習ができるようなシステムもできたら、みんなコンサート行っというて、次の日、「じゃあ、それちょっと取りにいこうか」と。「下見がてらに乗っとうか」とかいうふうに、いろいろ広がりが見えるのかなという気がしました。何か明るい未来が見えてきたような気がします。ありがとうございました。

(青木部会長)

ほか、どうぞ御意見。川真田さん。

(川真田委員)

「水上バス」が続いて申し訳ないんですけど、「新町川を守る会」なので、「川の駅構想」の話も私も関係者の一員として参加させてもらってるんですけど、何回も乗っていると、見頃がある場所とかよくわかると思うんですけど、今の時期だと、夜乗って阿波おどりの練習の風景を見るのがすごくいいというのを私たちは知ってるからその時間に乗るんですけど、知らない人が多いですし。

あと、もうちょっと見られるスポットを増やす。万代町の倉庫街も今けっこうきれいに開発がされてると思うんですけど、中はきれいなんだけど外見がもうちょっと派手

になればいいなと思うので、今あるものを生かした水辺の見所を増やすと、アスティまで遊覧船というのもすごくいいのかなと思いました。

あと、中の話で言うと、乗り手が今すごく少なくて、これは、新町川を守る会としても頑張らないといけないところなんですけど、乗り手を、完全に今ボランティアでやってるので、乗り手を増やすような仕組みを、これは行政と新町川を守る会と、どこか企業とかと一緒に組むことができると、遊覧船の本数も増やすことができているのではないかなと思いました。

(青木部会長)

ありがとうございます。ほか御意見は。どうぞ。

(岡田委員)

ぱっとひらめきで申し訳ないんですけど、何か過去に水上マーケットみたいなものってあったりしたんですかね。要は「何もない」というのではなくて、「水辺でモノを売っちゃう」みたいなものがあったら面白いんじゃないかと。逆にコンサートとかあるんだったら、グッズはもう水上でしか買えませんか、例えば。すいません、勝手提案です。

(青木部会長)

ありがとうございます。ほか何か御意見ございませんかね。1班の皆さん、何か追加とかございませんか。せっかくなので一言ずつどうぞ。

(石井オブザーバー)

「水上バス」は私たちもイチオシだったので、皆さんに意見いただいてよかったです。ありがとうございました。

(蔭山委員)

これ、全部結局つながってくるんですけど、「見所がない」というのが。新町川とかその辺にLEDが増えて、それもきれいで、それで遊覧もできて、それで渋滞緩和にもつながって、途中で駅で降りて、そこに魅力のある商店街とかがあってお買い物にもつながりますし、今おっしゃった「アクア・チッタ」の倉庫のあたりに勝手にホテル構

想が私の中であって、あそこに宿泊施設とかができると、降りたらすぐホテルに泊まれるとか、倉庫を利用したホテルがもしできたらですけど、降りて、LEDを見ながらおいしいお酒を飲んですぐ泊まれるみたいな一連の流れができれば、ただ来て帰るというだけじゃなくて、徳島の魅力を手軽に感じてもらって、帰ってもらえれば、またリピーターとかにもつながるんじゃないかなというふうに思います。

(山下オブザーバー)

ちょっと発表時間が短いということで、実はもうちょっと原稿は長かったんですけど、それでだいぶ省いたのもあるんですけど。さっき出ていた「パーク・アンド・ライド」もそうなんですけど、実は航路の話もあって、マリンピアあたりに仮に車を停めて、そこから例えば、南に向かって行く高速とか無料化になるので、そこからどんどん行ってもらうとか、いろいろ話は広がりがあったんですが、そういったものも含めて「交流」という感じで。

アニメーションも実は水をイメージして、さざ波が出るようにしてたんですけど出なかった。実は、モチーフは水だったんですけど、すだちくんが水上に浮いてる、一応モチーフは水ということで、最後の4点目でちょっと徳島市に固まりすぎかなというのもあって、四国全体でいろいろ「交流」というのも考えてみようかということでもとめてみました。ありがとうございました。

(青木部会長)

1班の皆さん、あと言い残したことはないですか。よろしいですか。他の皆さんもよろしいですか。最後に時間があれば、もう一度総括して御意見いただきたいと思います。それでは1班の皆さん、どうもありがとうございました。

続いて、基本目標2「経済・新成長とくしま」ということで、2班さん、どうぞよろしく願いいたします。

(岡田委員)

それでは、「経済・新成長とくしま」を実現するための提言としてとりまとめをさせていただきます。メンバーとしては、神山町の松本さんと、ダンクソフトの竹内さんと、フォレストバンクの僕になります。よろしく願いします。

まず、1ページ目の「『経済・新成長とくしま』の現状」ということで、これは「い

けるよ！徳島・行動計画」から抜粋してありますが、七つありまして、ちょっとわかりにくいんですけど、「経済加速」、「産業活性化」、「創業応援」、それから「新産業創出」、それから「しごとイキイキ」、それから「ひろがるブランド」、あと「次世代を支える林業」。この七つの項目に分かれています。

で、それぞれ、「経済加速」だったら「徳島経済飛躍ファンド」、「産業活性化」であれば「県内企業への発注」だったり、「県内産資材の活用」、「中小企業支援」、「人材育成」というのが挙げられています。「創業応援」については「起業家支援」、「バイオマス利活用」、「デジタルコンテンツ戦略」。あと、「新産業創出」に関しては、先ほども出ましたけれども、「LEDネクストステージ」とか、あと「産学官連携」とか「農商工連携」とかありますけれども、これは「公益財団法人とくしま産業振興機構」が中心となって進めております。それから、「しごとイキイキ」に関しては「雇用の確保」、福祉の話はまた後で出ると思うんですけど「福祉で雇用創出」、「就労支援」、それから、「ひろがるブランド」に関しては、「食品分野のブランド化」、あと農業とかの「6次産業化」、「海外展開」、「地産地消」など。あと、私は林業の方が専門分野なんですけれども「次世代を支える林業」ということで、「県産材の生産拡大」、「消費拡大」というのが、「いけるよ！徳島・行動計画」に記載されています。

こういうことに関して、七つの項目があるんですけども、私どものディスカッションの結果、現状の政策について、「これがいい」、「これが悪い」というのは置いて、「新規性のある」というか、「こういう考え方もあるんじゃないか」というような御提案をさせていただいたらいいのではないかと思います。七つの項目に対して八つの提案を書かせていただきました。

その軸となっているのが、この「体験型観光」というものです。今、お金持ちとか、サラリーマンにしても、東京で稼いでいるとか、そういう人たちが何にお金を使うかというと、「体験」にお金を使うというのがメインなんです。今までは高級ブランドとか、時計とか車とかにお金を使うようになってたんですけども、今はちょっとずつ変わってきてまして「体験」、自分が経験することが一番の価値だというようなことで、お金を使うということも、少しずつ増えてきていると思っています。

それで、徳島というのはいろんな体験ができる場所だというようなことで、体験型の観光であったり、農業であったりというのを広めていきたいと思いますというのが、今回のプレゼンテーションの軸になります。観光ができる、体験ができるとなれば観光客が増え

ますし、それで徳島を知ってもらうことができ、結果、経済が活性化して、雇用が生まれて、技術が成長するという、こういう流れになるんじゃないかという想定の下で、御提案をさせていただきたいと思います。

まず一つ目の「経済加速とくしまづくり」なんですけれども、これに対する課題と。観光に来てもらうにしても、「徳島への旅費が高い!!!」という課題が一つありまして、だいたい今、僕も往復してますけれども、東京・徳島間だと、普通に買ったら5万円飛行機代がかかります。安くても3万円とかかかってしまうんですね。バスで行ったら2万円ぐらいで抑えることもできますけれども、それがやっぱりネックになっているケースが多い。ということで、一つ目の御提案は、「徳島阿波おどり空港にLCCを!!!」ということで、いろいろこれは検討を既にされている部分もあったり、徳島空港の発着枠がもうぎりぎりになっているようなところもあったりするんですけれども、香川、高松に関しては、今回「ジェットスター」だけじゃなくて、「春秋航空」が成田から飛ぶというようなこともあったり、愛媛に関しては当然同じように、松山空港と成田空港での行き来があたりします。徳島もじゃあ成田空港と結べばいいのかというと、多分そうだけじゃないので、ちょっと面白みを含めて「徳島ー徳之島間」。「ちょっと絶対要らんやろ」と。「徳島と似てるから、徳之島と結びました」みたいなのもちょっと面白いかないというふうに思いました。人だけじゃなくて、徳之島では牛も生産されてますので、子牛を乗せて徳島に運ぶと。で、阿波牛を育てるというようなこともいいんじゃないかなと。まあこれは半分ギャグみたいなものですけど、そういうのもありかなと。

あと、中国とのLCCというのも可能性としてはありますけども、それは、例えば、医療分野とか、それぞれの連携ということでLCCというのを活用していくというのがいいんじゃないかなと思っています。

具体的な施策がそれなんですけど、波及的効果ということで、今よく言われてます、インバウンドの観光誘致、要は例えば、関空に着く便を、徳島空港を経由させるとか、佐賀がやってると思うんですけど、佐賀は福岡に入らない飛行機を受け入れてる。で、佐賀から福岡に流してるとか。そういうのもあります。徳島も同じように関西圏として、経済面では活躍できる場所にあると思いますので、例えば、関空に降りてるものを徳島に受け入れていくと、そういったことは考えられるんじゃないかなと思います。

あと、サテライトオフィスの活性化というのもありますけれども、やっぱりサテライトオフィスをつくるためにも、旅費使って行き来しなければいけない人って結構多いの

で、特に経営陣に関しては行き来は出てくるので、そういった意味でも、やっぱり高松使うっていうのもありなんですけど、そういうのもあるよということです。これが一つ目の提案。

で、次の課題が「農林水産業の6次産業化の動きが鈍い!!!」。これは他県に比べてというようなイメージにもなるんですけども、この課題に対して提案、「第1次産業の6次化から4次元化へ!!!」にしましょうと。6次化を通り越して4次元化するというような勢いで、というような御提案です。

これは何かというと、軸としてある体験型の観光と農業を組み合わせるとか、サービス業と農業を組み合わせるとか。そういう農業とか林業とか漁業だけじゃない分野との連携をごちゃごちゃにしてやっていくというようなことが提案です。

そうすることで結局、ITとかでは特にそうなんですけど、朝起きて農業をして汗かいて、頭がすっきりしたところで、例えば、システムの作業に入るとか。そういうこともできると思いますし、実際農業やりたいなって思った人がITに入ってきたり、観光やりたいなって思った人が農業に入ってきたりとか、そういったいろんな連携が可能になるのではないかなと思います。一応僕も6次産業化のプランナーとして徳島県では指名されているというか、入ってるんですけども、まだ件数が他の人より少ないということがあるので、もっといろんな行事でつながっていったらいいんじゃないかなというのが二つ目の御提案です。

次のページは、「産業活性化・創業応援」というような軸。ちょっとこれは無理矢理集めた感があるのであれなんですけれども、この課題3、「体験型の施設が上手く活かしきれていない!」。要は、体験できる施設っていうのはいっぱいあるんですけども、それが上手く連携してない、ソフトとして連携してない、ということに対しての提案です。これが、『徳島ものづくりラボ』をつくる!!!と。さっきも木工の、福島の話が出てたと思いますけれども、例えば、「木工会館」はもうあれなんでわからないですけども、「木材利用創造センター」とかそういうのも使って、木工が体験できる「ラボ」みたいなものをつくる。「ラボ」というちょっとカッコよさげなものを軸にソフトでつなげていってあげる、というようなイメージです。例えば、「技の館」が「藍染めの体験ラボ」、で、「木工会館」が「木工体験ラボ」みたいな。余ってる木工の機械を使って、東京ではできないような木工ができます。それから、これはちょっと新しいですけど、3Dプリンターを使って体験型のラボをつくっていく。で、藍染めとか木工とか陶芸と

か3Dプリンターを体験できるし、それを集積した施設でもありかなと。あるいはもう、今あるハコを上手く使ってソフトでつなげていくというのもありかなと。これはやり方はいろいろあるんですが、アイデアとしては「ラボ」というつながり、これも体験型の観光につながっていきます。体験できる、だから東京からも土日だけこっちに来て、例えば、眉山で机をつくってるっていうデザイナーがいたりとか、やっぱり体験ができるっていうのは東京でもなかなかできないことを徳島でできるということなので、そういったことで、波及的効果としてはですね、体験型の観光施設というくりができるので、そういうのがいっぱい体験できるよとなれば、もうちょっと観光客も増えてきたりとか、あと海外からもいろんな体験をしに人が来たりとか、インバウンドの誘致ができたりとか。あと、観光客だけじゃなくて、地元の人たちも通って、あとは職人の人たちもいて、一緒に文化を継承していきなり、技術を継承していきなりということもできるんじゃないかなというふうに思いまして、三つ目の提案とさせていただきます。

続きまして、これがメインなんですけれども、「新産業創出とくしまづくり」、これ課題4の「デジタルコンテンツの最先端企業を生かしきれていない！」ということで、僕の先輩にあたるんですけれども、「チームラボ」の猪子さんという方がいらっしやって、今回ニューヨークでの展示会をされました。これはニューヨークの「ペースギャラリー」ということで展示会、すごく有名な、ピカソとかを扱ってるところなんですけれども、今まで400万円しかしてなかったものが、倍以上の金額がついたと、倍だけじゃないという話も出てます。

こういう徳島出身の経営者がやってる企業を応援していてもいいんじゃないかなというところで、これは御提案として、「日本初デジタルアート美術館をつくる！！」。で、「デジタルアート」という美術館は今、日本にはありません、固定の施設としては。これを日本初でつくりましょうと。

実は「チームラボ」っていうのは、佐賀でイベントを何億円かかけてやってます。先日、高松でもイベントをしました。徳島では、というと、なかなかまだ小さいイベントしかできていない。でも、やっぱり出身徳島でこれをやっぱり実現するっていうのがいんじゃないかなと。別に個別の企業を応援するというのではなくて、「デジタルアートの発祥の地」というようなかたちで、今だったら言えるのかなというふうに思っています。

結局、そのデジタルアートっていうのが当然LEDアートフェスティバルっていうの

を引き継ぐようなかたちにもできるかなというふうに思いますし、デジタルアートを使った遊園地、「吉野川遊園地」も閉じてしまったようなので、子どもたちがデジタルアートの美術館で、水族館とかもね、子どもが描いた魚をアートに映し出してその魚が泳ぐみたいな、そういうのもあったりとかするので、遊園地みたいな施設もできるのではないかな、というのがあります。場所は勝手に、大塚さんが関わるという話もあるんですけど、徳島空港跡地みたいなところにあつたらいいかなと思いました。これイメージとして、次のページ、これスイスにあるんですけどデジタルアートの美術館、こういうのがあったりします。これからハコモノをつくるというのはすごく大変な作業ですけども、ひとつこういうものを軸に、「これが体験できるのは徳島しかない、だから徳島に行こうよ」というようなことがブームになってくればいいような気もしました。世界レベルでこのアートは展開されてますので、それは猪子さんのチームラボだけじゃなくても、「デジタルアートに関しては徳島県」というようなことはすごく面白いんじゃないかなと思いました。

で、「しごとイキイキとくしま」なんですけれども、ここに関しては課題を二つ、提案を二つ出させていただいています。一つ目は、「職業訓練が十分に機能していない!」。職業訓練は実際やってるんですけど、それが十分に機能していないということに対して提案。「職業訓練に直接民間企業から講師を出す!!」。雇う人が講師として行くことで、自分がどういう人がほしいかというのわかりますし、どういったことを覚えてほしいというのもしっかりお伝えすることができると。それで、職業訓練をしてもらって、その後、就職するということにもつながりやすいということがあるんじゃないかということで提案させていただきました。

もう一つの課題が「農業の打ち出し方が堅すぎる!!」。やっぱりちょっと堅いということで、提案6「『カッコいい農業』をアピールする!!」。これも体験型農業ということで、いろいろ体験してもらいながら、わかってもらおうというようなアピールをしていけたらいいなという提案です。で、波及的効果のところのポイントなんですけど、「農業も3Kから4Kへ!」。徳島県は4Kがやっぱり話題になってますので、やっぱり3Kというのが、「きたない」、「くさい」、「きつい」だったんですけど、これも4K、「カッコいい」、「高収入」、「機械化」、もう四つ過ぎますけど、「観光」、「健康」、「筋肉」、最終的には8Kまでいきたいと。ここが一番わくところです。

では、次の提案にいきたいと思います。「ひろがるブランドとくしまづくり」という

ことで、とくしまブランドなんですけれども、課題としては、「ふるさと納税だけでは他県に負ける！」。今、ふるさと納税の争いはすごいです。いろんなものを送ってきてすごいです。じゃあこれをどう変えればいいのか、提案7です。「徳島県公認ふるさと便をつくる！！」。月額制で徳島の旬をお届けします。で、内容は毎月変わるので、知らなかった徳島の魅力というのを首都圏の人たちが知ることができるということです。僕も東京に半年住んでるんですけど、一応、海部から毎月2週間に1回、僕の友達から野菜が送られてきます、メッセージ付きで。「暑いなあ。ようけ豆ができたぞ」というコメントが入っています。「豆が多すぎる」というのを経験して、まあそういうのもちょっと面白いかなど。で、都会とふるさととのつながりというのを深めることをできたりとか、ふるさとへの、逆に「あの人会ってみたいな」というふうに、さっきの農業、就農にもつながってくるというのがあるんじゃないかというのが七つ目の提案です。

で、最後の提案なんですけれども、これは僕の本業分野で、あまりにも現実的な、ちょっと難しいんじゃないかと思いながら書いたんですけども、課題として、「木材の流通量が低すぎる！！」。これは四国4県、香川はあれなんですけど、高知県、愛媛県に比べても当然少ない。「林業県」と言われながらも、木材の流通量が非常に低いというところで提案です。「木材専用の流通網を整備する！！」。名付けて「WWW:Wild Wood Web」です。これは「World Wide Web」をパクりました。「World Wide Web」というのは、「インターネットの世界に広がる蜘蛛の巣」というふうに言われていますけど、木材の「Wild Wood Web」をつくるといううたい方で提案してみました。徳島県の尾根伝いにケーブルをドーンと張ると。で、木頭村の奥から市内まで木材がドカーンと行くようにする。やっぱり神山もそうだったじゃないですか。やっぱり徳島県内にケーブルテレビ網が広がってたので、今こういうものが生かせる。じゃあ次のインフラをつくるのはやっぱり徳島県、行政の役割になるだろうと。そして、次のインフラとして、尾根沿いに今余ってる土地がいっぱいあるところで、県が土地を全部買い取って線を引くと。そしたら、木材は出てくるし、もしかしたらおばあちゃんも一緒に出てくるかもしれないとか、物資の輸送とかにも使えたりとか、災害時とかに役立ったりとか。で、対外的に、輸出県としても需要に応えられるような木材の供給量を確保していくということが出来るんじゃないかという突拍子もない提案で僕の発表は最後の締めを迎えることになりましたが、木材のそういうでかいものができても、そういう体験型の観光客も増えてくるということで、体験型の観光

を実施できる「ラボ」とか、第1次産業の拠点というのをつくっていく。ということで最初に戻りますけれども、観光客が増えれば、徳島を知ってもらって、経済が活性化して、雇用が生まれて、技術が成長すると。それが循環していく中で、徳島県としての競争力だったりとか、ナンバーワンというところだったりとか、ブランド化ができるんじゃないかというふうに、長くなりましたけどこれで終わります。

(青木部会長)

ありがとうございました。それでは2班の発表の「経済・新成長とくしま」について、何か御意見を自由にいただければと思います。よろしく願いいたします。

(福島副部会長)

猪子さんのアート美術館、多分7月の末から1か月、東新町のところで水族館ができるので、もうこれはもうできたようなもんですよね、多分。その後、またつながっていくと思いますので。もしかしたらこれを知っての企画だったかもしれませんよね。

ほかのところもすごい面白くて、「かっこいい農業」というのも、多分いろんなところでいろんな農家さんが取り組まれてて、コンテストとかもしてますよね、お洋服の。そんなところも含めて、やっぱり県全体で進めている「もうかる農業」というのも、もちろんここに入ってると思いますので、高収入のところ。これどんどん進めていったら面白いなと思いました。

あとは、「WWW」はもう最高に面白かったです。で、先ほど伺ったお話なんですけど、このふるさと納税は徳島県、全国で9位らしいんです。特に他の地域みたいに、特別何かお送りするとかというのをしてなくて9位みたいなんです。で、何でだろうっていうのをちょっとまた教えてくださいってさっき言って出てきたんですが、なので、こういうことをすると、もっともっとアップしていくのではないのかなと思って、すごい面白いなと思いました。

全部にちょっとずつというか、本当に大きくユーモアが入っていて、楽しく聞かせていただきました。ありがとうございました。

(青木部会長)

ありがとうございました。ほかに何か御意見ございますか。

(池添委員)

一応、県の農林水産審議会になぜか入れていただいているんですが、やっぱりここみたいに若手部門とかがないですし、実際何十年もされている方々の意見で、多分前年度と同じような課題がずっと出てるのかなって素人ながらいつも話を聞いていて思うので、こういう感覚の農林水産審議会があったら、何か一気に変わることができるのではないかなってというのは思っております。

あと、子どもを巻き込むというのは、やっぱり地域を知ってもらう上で、何十年後かに必ず成果が出ることで、すごくまちづくりとしたら、子どもを絶対巻き込まないかんと思うんですけど。例えば、「キッザニア」とかだったら、あれって今、西宮と東京にもあるんですかね。西宮だったら、九州の人、全員西宮行ってますし、徳島からも西宮行ってますし、東京までも飛行機乗って行ったりしますし、そういう意味で、「徳島版“キッザニア”的なもの」が、徳島のことを知ってもらいながら、その美術館も含めてできれば、経済的にも、今後の徳島が一気に成長できるきっかけになるのではないかなというふうに感じました。

(青木部会長)

ありがとうございます。ほか御意見ございませんか。

じゃあ私も意見を。やっぱりいいなと思うのは、「徳島ものづくりラボ」というこの視点ですね。「ラボ」で統一するというかたちだと思えますよ。で、僕が言いたいの、もちろん「藍の館」とか、今あるのを上手く、「ラボ」というくくりで一つにまとめて、今、岡田さんの発表の中で、「体験をしたい人が都会から来るんだ」と、そういう話だと思えますが、「体験」というキーワードをやっぱりもう少し、この「ラボ」という言葉ね、非常に響きがよくて。「ものづくり体験しますよ」というツアーじゃなくて、「ラボ」で統一したものの種類を組み合わせ、それを生み出していくというのも一つの方向性じゃないかなとちょっと思いました。

そしてもう1点は飛行機、LCCですね。「なんで徳島ここのかな」とずっと、もちろん搭乗率とか、そういったものも関係してると思えますけど、いざとなったら岡田さんが飛行機を飛ばしたら。小型の50人ぐらいのだったら飛ばせるかもしれぬので、岡田さんだったら。半分冗談ですけど。ぜひ、LCCは推進すべきだと思います。でないと、やっぱり「僕は東京行くんだったら飛行機でなくてバスで行くわ」というように

なる危惧もありますので、やっぱりその辺はもっと空港を活性化させることによって中へ入れる、または、こちらからも出していくというふうなことに繋がっていくんじゃないかなと個人的に思いましたので。大変勉強になりました。ありがとうございました。

ほかに何かございませんか。

(福島副部長)

飛行機って定期券みたいなものはないんですか。あったらいいと思うんですけどね。お席が確保できるかどうかはまた予約するとしても、「何か月とか半年とかで、何回は行けるよ」とか、そんなのがあれば面白いなと。飛ばしていただいたときに、そういうものをつくっていただいたら、それこそサテライトでたくさんいらっしゃってる方が、もっともっと来やすくなるかなという気はしましたので、よろしくお願いします。

(岡田委員)

民間とそういうかたちで手が組めればいいんですけどね。

(青木部長)

ありがとうございます。ほか何か御意見ございませんでしょうか、この2班の「経済・新成長とくしま」について。では、最後に1人ずつお願いします。

(竹内委員)

岡田さんは昨日までサンフランシスコということで、僕も先週までアメリカ、ワシントンDCに行っていました。で、「マイクロソフト」のカンファレンスで行ってんですけど、その中で新しく、3代目のCEOになったサティア・ナデラの話がありました。

で、よく使われる例えなんですけど、「コーヒー豆を売ってるようじゃ儲からないんですよ」と。で、「スターバックスを見なさい」と。「あんな高いコーヒーが飛ぶように売れてるじゃないか」って言ってるわけなんです。で、「お客様は“体験”を求めているのであって、コーヒーの味を求めているんじゃない」と。「スターバックスがおいしくない」って言ってるわけじゃないんですけど、そういうことを言ってらしたんですね。

徳島も一緒に、健全に儲けないと、持続可能なビジネスになってないと思うんですね。なので、しっかり稼ぎましょうということで、「食べ物おいしいから来てください」とか、「自然いっぱいあるから見に来てください」だけじゃちょっともう厳しい時代なの

かなという意味で、「体験型」というのをもう少し採り入れていこうというふうに提案させてもらいました。以上です。

(松本オブザーバー)

3人で話を進める中で、知名度だったりブランド化だったりというのが重要だなというのをつくづく思うんですが、アンケート結果にもあったんですけど、やっぱり「知名度が低い」、「知らない」という意見もあったりするので、さっきのふるさと納税の9位、9位も十分すごいとは思いますが、やっぱりここで1位を目指すというか、1位、ナンバーワンというのはやっぱり特別なものがあると思うんです。やっぱり「1位になっとなったら、ふるさと納税してみようか」という人も増えると思いますので、どの分野、どの産業にしても、1位を目指すことによって生まれるものというものが多くあると思いますので、言葉は悪いんですけど、他県にけんかを売って蹴落としてでも一番になるような取組をしたら、例えば、その県とでも相乗効果が生まれたりとか、1位を目指すことによって生まれてくるものが多くあると思いますので、そういう競争力を高める取組というのも重要だと思いました。

(青木部会長)

ありがとうございます。ほか何か御意見ございませんか。では、2班の皆さん、どうもありがとうございました。

それでは、3班の発表にまいります。ここは、蔵本さんと組ませていただいて、本来は蔵本さんと発表を共にする予定だったんですが、今日急遽来られなくなったので、私1人で発表させていただきます。

まずはじめに、この「いけるよ！徳島・行動計画」の研究をするにあたり、これが一体誰のものなのか、どういう視点で、どういうふうにつくられているのか、という議論を一番初めにしまして、これはかつてリンカーンが「人民の人民による人民のための政治」というのを言いました。だけど、これは多分、私は、「県民の県民による県民のための行動計画」でないと、誰も多分行動計画は見ない。それに、これは知事のものでもないし、県の幹部のものでもない。まして、我々クリエイイトのものでもないという視点からまず入っていきました。

そこで必要なのが何かといいますと、やはりタイトルに書いてあるとおり、「徳島県

“全県民”計画」。これはもう全県民が行うべき行動の計画なんです。よろしいですか、おじいちゃん、おばあちゃん、子ども、皆さんも計画を実行しなければならない。ですから、「トクシマ作戦」というのを考えつきました。ここからは非公式でございますので、すべてカットでお願いします。

この作戦はですね、「いけるよ！徳島・行動計画」の基本目標3の『安全安心・実感とくしま』～地域を創る～の重点戦略5項目について現状の分析を行い、10年後をしっかりと見据えた「創造的実行力」を十分に発揮する作戦計画を立てました。で、この作戦計画実施時に、一応予算は全部あるという視点をまず一つ想定しています。ですから、今からする提案は、この行動計画を精査して予算の中で組んだものではありません。で、我々の3班のところ、「安全安心・実感とくしま」という視点は、命を守らなければいけないという視点でございますので、予算うんぬん関係ないです。全部つぎ込まないかんです、ここは、という視点で考えた作戦でございますので、皆さんそういった気持ちで見ていただければと思います。

まず1点目の重点項目「みんなで守るとくしまづくり」です。ここから室戸沖、数百キロに何があるか知ってますかね。海の中に、深さ4千メートル、南海トラフと呼ばれる巨大断層があります。それを想定して、まず1番目「みんなで守るとくしまづくり」というのを考えました。

まず一つ目、「家族継続計画、FCP」というのを皆さん御存じでしょうか。これは、企業をされてる方、岡田さんや竹内さんは多分「BCP、企業の継続プラン」というのは御存じだと思います。だけどそうじゃなくて、私どもが提案したいのは、「家族継続の計画」というのを提案したい。「また、ほんなこと言わるわ」と思いがちですけれども、なぜこれを計画したかと言いますと、やはり家族の安否、自分の子どもや、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんが大事でないと、いくら業務命令であってもBCPできないです。やっぱり心配。もちろん業務、使命を持って医療職や福祉職、また管理職というの一生懸命仕事をすると、そんなときでも。だけど災害時、また危機が迫ったとき、何かあったときは、やはり家族が安心・安全だということがわかっていなければ、自分も仕事はできないと思うんです。ですから、この「ファミリー・コンティニュイティ・プラン」というのを御提案したいと思います。これはもう是非とも、決して難しいことでもないし、予算も要りません、はっきり言って。今日家に帰って「みなさんどうするで」と。もし南海トラフ巨大地震が起こったときにどうするか

というのをしっかりと御相談ください。相談するときのポイントは、まず避難、まず地震が起こったらどうするか、どこへ逃げる、避難場所はどうする、避難経路はどうする、また持ち出しはどうする、情報はどういうふうに分かれる、というふうな、ポイント、ポイントを押さえて、この家族の計画を立てていただきたいなと思います。家族あってこそ企業やみんながあると私どもは考えておりますので、この「家族継続計画、FCP」を、是非とも、これは県としても進めていただければなと思います。

そして続いて、「県立高等学校“環境防災科”の設置」ですね。実は、1. 17、阪神・淡路大震災のあと、神戸の「舞子高校」に、防災教育を推進する学科が日本で初めて設置されております。東日本大震災以降、四国でも南海トラフ巨大地震のことが十分に心配されております。そこで、やはり県立高校に、「“環境防災科”をつくろうじゃないか」という御提案をしたいです。なぜかという、既に県南部、海南高校や富岡西高校では、防災クラブ等が、非常に熱心に研究をしたり、発表したりされております。だけど、それは単的なものなんですね、あくまで。単的な活動です。そうじゃなくて、学科にしてしまえばいいんです。普通科、総合学科、理数科、工学科、じゃあもう環境防災科にいこうかというぐらいの勢いで、これは不可能じゃない、絶対に。これは絶対できると思います。それを四国にはないので、やはり10年後を見据えたら、自分も10年後はうん十歳になります。皆さんもうん十歳になります。更に10年経つと、更に10歳プラスになります。やはり教育をしっかりと、次世代を育てておくということは根底で大事なことです。つまり、防災を正しく学び、しっかりと知識を得る、そして、行動できる次世代の教育というのは非常に大事だという視点でこれを御提案したいと思います。

そしてさらに、「高校生、中学生だけじゃだめだよ」という視点もあります。だからもう学校教育、国として「学校教育に組み込む“防災学”」を取り入れてほしいというのを、国に対して、文科省に言います。これは、なぜかという、皆さん知ってのとおり、小学校の頃は、算数、国語、理科、社会、最近英語がプラスされております。それプラス、中学校も、もちろん小学校もそうですけど、体育、家庭科、技術までは皆さん体験したと思います。で、さらに「防災」も特殊科目として義務教育に付け加えます。なぜかという、小学校や中学校のときから防災のことを学ぶことというのは非常に大事だという視点がございます。それで、ここで学んだとをさらに、“環境防災科”のある高校に進んでいただければ、さらに、社会に出たときに、エキスパートな防災人がで

きるということでありませぬ。もちろん就職は、自衛隊や警察、また消防関係等が必ず受け入れをしてくれるはずでせぬ。ですから、そういった視点で、こういった“防災学”を、小学校や中学校の学校の教育に入れ込むということ。単的じゃだめです。「防災クラブやっています」、「防災・消防の何かやっています」というのは既にどこもやっていますし、徳島県さんも十分にやられているのは、十分に存じてあります。そうじゃないんです。学校の教育に入れる、これは力強く言っておきます。

続いては、「全県民防災訓練計画」です。“県民防災の日”を制定して、県下全域で全県民による防災計画の実施をしてもらおうということですね。多分知ってるのは9月1日を皆さんイメージするかなと思います。だけどそうじゃないんです。私どもが言いたいの、全県民、徳島県下全域で行うと。今、徳島県も総合防災訓練や、また各市町村も市の防災訓練とかは確実に行ってあります。だけど皆さん参加したことありますか。一般の方、多分ないです。それに関係する関係者、もしくはボランティア等々が参加してるだけです。そうじゃないんです。もう全県下、こう言う「またわけわからんこと言よるな」と思われますけど、全県下にサイレンを鳴らしてですね、実際に訓練をします。本当に「シェイクアウト訓練」でもいいです。今、実際鳴ったら、まず一番初めにさっと隠れるというふうなシェイクアウトの訓練、これは昨年、確か徳島県の方も行ってあります。それを全県民、もちろん公共交通機関や病院といったところに支障が出るかもしれませんが、でも、敢えてそれを実施するというのを御提案したいと思います。

次に2番目「いのちを守るとくしまづくり」。「災害発生時公衆無線LANの自由化」。『00000 JAPAN』ファイブゼロジャパン」というのがあります。これは何かといいますと、多分、IT関係の皆さんは知っておられると思います。普通、ドコモ、ソフトバンク、auだと、そのキャリアに合わせたサーバーしか使えんのです。で、災害時、「ソフトバンクだけよくつながったよ」とか、「いやいやauだけつながった」、「ドコモがつながったよ」とかいう話があると思います。もし仮にAというキャリアが被災すると、Aの携帯端末はつながりませぬ。そうじゃなくて、災害時はどのキャリアでもつながるようなかたちの無線LANを自由化で飛ばしてほしいと。もうこれは既に協議の方が始まっておりまして、これを是非、徳島県としても支援をしていただいでですね、特に県南部、県西部等に被害が大きいといわれる想定をもとに、この自由化を進めて後押しをしていただければなと思います。

で、「津波救助艇の設置」ですね。これは皆さん、多分お手元の資料の一番後ろに付

いているかと思えます。これはですね、特に県南部等においてですね、もちろん「逃げる」ことが想定です。これ、勘違いしたらだめですね。船に乗って逃げるというのが一番の目的じゃありません。「まずは逃げる」という行動が大事です。けども、非常に漁業の町で「津波避難タワー」もつukれないようなところ、また、おじいちゃん、おばあちゃんが逃げるには、そりゃ20分あったら山に逃げられるけれども、20分たったら津波が来てしまいます。そういったところも県南部にはあります。そういったときに、実際にこれは、四国運輸局がIHIと提携して、もう既に試作品ができております。で、さらに情報によると、高知県には一か所配備がされているという情報があります。私の中では「ノアの箱舟」と想定してますが、このノアの箱舟を、他の委員会で実は発言したことありまして、一機4百万円ぐらいで購入できます。そうじゃなくて、10年たつと多分もっと大きいのがつukれます。本当にノアの箱舟ぐらいがつukれるかもしれない。ですから、それを県南部に設置して、本当に避難が間に合わないおじいちゃん、おばあちゃんや、お年寄りの方、また、病人の方を一番にその船に乗せるということ、また、子どもさんを一番に船に乗せるということも、これは有効な避難の手段の一つとして御提案をさせていただきたいなと思えます。もちろん、いろんな弊害があるというのは私知ってます。定員いっぱいになるときに「助けてくれ」と言うて、「ほなハッチを閉めるんか」とか、「マニュアルはどうするんか」とか、そういったことは実際、四国運輸局でも議論がされております。だから、それを全部勧めるものではないです。けど、方法、手段の一つとしては、やっぱりあらゆる方向を私は考えるべきだということで、この「津波救助艇の設置」を御提案したいと思えます。

続いてさらに、「全県民オリジナル自転車免許取得の日」ですね。なんと、あと10年たつと全員、自転車免許を持ってもらいます。いいですか。今、免許センターは移転して、確か徳島空港の旧ターミナルのところに建ってますね。そこへ行ってください、皆さん。「なんで」って、検定と試験を受けてください。10年後皆さんも受けてもらいます、というのを想定してます。なぜかという、やはり、「自転車王国とくしま」をうたっております。だからこそ、全国で初めての自転車免許を全県民に。小学校から中学校から高齢者まで。お年寄りの事故も大変危ないです。増えております。また、マナー違反がたくさんおる。そういったのをきちっと自転車免許で取得をしていただいて、法的整備も含めてこれはしっかりとやる。もちろん違反したら無免許はだめです。自転車免許と運転免許は両方二つ所持することになります。ですから、そういった視点で、

オリジナルな自転車免許を発行するというのを一つ、安全・安心のために必要ではなかろうかなと御提案をさせていただきます。

「暮らしを守るとくしまづくり」ですね、ここからは、食のこととかいろんな問題があります。昨日も中国の方でね、大変大きな問題が、某フードチェーンと某コンビニで大変な問題になっております。そういうふうには食の安心・安全の問題というの、この研究のテーマでありました。で、是非とも先ほどの農業の話が2班の方でも出ました。そのときにこれも付け加えてほしいんです。「“QRコード”添付のとりくみ」。QRコードを付けてください。なぜかというとなんかやっぱり生産者の情報。消費者側に立つと、誰がつくってどのようになって、どういうふうなところから運ばれて、どういうふうになっているのかというのが今はもう知りたい時代。で、安心・安全な食を食する。子どもに与える、お年寄りに与えるということになりますので、QRコードを是非とも、先ほどの2班のところとここはくっつけていただいて、是非とも産業化が進んだときに、QRコードも当然常識のレベルで、もしくは10年たつと、「QRコードじゃない新しい何か」ができていくかもしれない。それをきちっと証明で読み取れるようなのを是非とも推進していただきたいと思います。

次に、「暮らしのサポーターの若者化」ですね。これは現行でいいますと、「暮らしのサポーター」といまして、伝える・学ぶ・活動する、だったかな。今、350人ぐらい認定を受けているというのが消費者協会等が中心でやられてる施策があります。それにもやっぱり高齢者の消費者被害というのが特に最近も多いんですけれども、やはり若者の被害ですね、ネット被害者。「お金を振り込んだけど物が届かない」とか、当然のように実際にもあります。ですから、若者のネット被害者等の情報もシェアしていただいて、「ああ、ここのブラック的なところは気をつけよう」とかっていうふうなことも、是非ともこれはサポーターをつくって、是非ともネット被害を少しでも食い止めると。これも0円でできますから、是非とも施策に取り組んでいただきたいと思います。

続いては、某施策と同じではありません、これは「国土強靱化計画」。今、国が進めているのは「国土強靱化計画」ですね。それではなくて、徳島のための国土強靱化計画を推進していただきたいと思います。これは、命を守る視点からハード面での整備をバンバンします。まず一つは、特に河川ですね。やはり、津波対策の防波堤等をバンバンつくります。それと一番のポイントは、水門の問題がありまして、実は東日本大震災の時に、消防団等が慌てて水門を閉めに行って、津波が来て流されて亡くなったという事

例がたくさん報告を受けております。そうじゃないと。だから、そういう自動化で、今これは県南部県民局が実は進めております。水圧で門が閉まったり、自動で水門が閉まったりというふうなのを開発して、そういった意味での県土強靱化計画という趣旨で捉えていただければと思います。それと、もう一つ徳島県に大事なのはやっぱり県南部においての、つながってこそそのネットワークの道路。道路が絶対要ります。これ県南、阿南市の人間は私だけです。もう絶対道路が要る。なんでかという、人・モノ・お金を運ぶのは道路。大事です。今、県南部は国道55号が1本しかありません。南部に縦に走ってるのは。だけど被災するのはもう確実です。もうぼろぼろになります。そういったときに代役の道路というのは、今、日和佐道路というのが一部、美波町にできてるだけなんです。それだけではつながらない、モノが運べない、緊急の輸送ができないということになりますので、これは徳島県としても是非とも、もちろんこれは陳情も上げて、国もしっかりとやっておりますが、是非とも高速道路、県南につなげていただきたいと思っております、というのが私の切実な個人的意見も含めてお願いでございます。それともう一つ、逆に今度、香川県に行く高松道というのがありますね、皆さん。高松道が実は対面の2車線のところがあるんです。4車線じゃなくて。2車線だと、徳島道もそうなんですけど、やっぱり何かあったときに、緊急車両であるとか、物資の大きなトラック、自衛隊のトラックというのが運べないケースが事例としてあります。ですから、是非とも道路は4車線、ジャブジャブ使うというのではありません。4車線にして命を守るため、モノを運ぶためにも緊急避難路という視点で、必ず道路は4車線化を高松までつなげていただきたいと。それで、なぜ、高松、高松と言うかといいますと、災害において、高知と徳島は多分アウトになります、空港からすべてが。で、一応、四国の災害拠点となる空港は高松空港になり、高松の方へまず物資等を預けるような計画になると思います。つまり、高松からの道がないと、徳島には物資が来ないおそれも十分に考えられます。ですから、高松道は「命の道」だと。高松から海南、穴喰まで、しっかりと道をつけていただきたい。そういった意味での県土強靱化計画を進めていただきたいという視点でございます。

で、4番「しっかり医療とくしまづくり」です。医療面もしっかりとやっていかなければなりません。本当に命を守る視点になります。「医療スタッフの地域派遣制度」ですね。「県内地方地域への独自の医療スタッフの派遣制度」ですね、これは是非とも、法的ないろんなしがらみがあってなかなか難しいのが現実なんですけれども。これは人

材派遣会社をつくって、そこから医療スタッフを派遣するというものではありません。それでは人が来ないんですよ。派遣すると人材費も高い。県南、県西には来ないんです。本当に来ない、本当にぎりぎりです、はっきり言って。ですから、もう皆さん、看護学科はたくさんあります。四国大学もあります、文理大学もあるんですよ。看護学科がたくさんあるのに、みんな大きい病院、名だたる病院や公立の徳島県立中央病院といったところにみんな流れてしまう。流れてもいいんです。流れる代わりに、そういったところから3年ぐらい人材を派遣してほしいという制度をつくってほしいんです。民間に流れると、皆さん行きたがらないんです、若い人は。やっぱり大きい病院にまず一番初めは就職しようかという若いナースが多いんです。それはそれでいいんです。だけど、例えば、「徳島大学附属病院に私入ったけど、辞令で3年間阿南市の方へ来いと言われるかもしれん」ということを想定で、そういった意味での派遣制度をつくってほしいということです。人材派遣会社はよく、私も医療福祉におりますと、電話がかかってきて御紹介をいただくんですけれども、やっぱりちょっとお金が高いし、なかなか厳しいということで、逆にその民間的な、公共的な病院だけじゃなくて、もちろん民間の大きい病院とかとこの制度を組み込んでいただいて、大きな民間の名だたる病院からも来てくれれば、官民が協働になって、さらに地方が看護婦やリハビリスタッフの不足を解消できるというふうに考えてます。

さらに、「全県下病院内カルテ共有化計画」ですね。これはもう皆さん体験した、まあ皆さん健康だったら病院あまり行かないですよ。何が言いたいかというと、例えば県内の病院、例えば大きな総合病院に行った、けどちょっと風邪だから民間の診療所へ行った、ちょっと耳鼻科へ行ったとなると、全部カルテばらばらに作られますよね、今。そうじゃないんです。もう県民に1人一つずつカルテを作ってクラウドに上げとけばいいんです。で、どこからでも何かあったら、Aという病院、Bという病院、Cという病院が、そのAさんのデータを共有できて、カルテが一括でポンと出てくるというようなシステム。これは非常に画期的、これは絶対技術的にできるはず。まあ個人情報関係で多分できないというのも多々あると思いますが、これ、夢のような計画です。これがあれば、病院のカルテとか事務的な作業の削減にもなりますし、自然災害等が起こった場合にもカルテの共有ができるということになりますので。じゃないと、例えば東日本大震災の時にAという病院が潰れてしまっただけで、全部カルテも流された。そうすると、初診したドクターが、全部一からやり直さないかん、薬も何かわからんとい

う事例も発生しておりますので、これはもう絶対にしてほしい。予算をバンバン使ってもやってほしいという一つの施策です。

最後は「生涯健康とくしまづくり」です。「“県民大健診週間”の日」ですね。子どもから高齢者まで健康意識を高めようということですね。いろんな健康の方、ちょっと勉強すると非常に健診率が悪いんですね。これは若者の皆さんじゃなくて、もうちょっと年配の方々が健診に行かないんです、なかなか。だから、いろんな病気が後から発生して、早期発見・早期治療ができない。あとから「大変じゃ、大変じゃ」というステージが重くなってから見つかるから、それは助かりませんよと。そうじゃないと。一週間かけて、子どもから高齢者まで健康意識を高めるために、9月の1週目から2週目までは全員が、1人1回は必ず健診を受けるというふうな週間をつくってもいいです。そこへバンバン健診日を流します。で、無料でやります、これは。県民のためです。で、子どもから高齢者まで。子どもさんはもちろん「健診が必要か」というのは、いろんな子育ての相談であったり、アトピーとかいろんな問題があったときに、こういったことが発見されることもありますので、この健診週間というのは、もっともっと打ち出すべきです。ちょこちょこやってるようですけど違います。もっともっと強くやるべきです。

で、さらに、「“全県民万歩計計画”の日」ですね。これはカロリー計算、栄養士さんと保健師さんはすぐわかると思います。1日のカロリーを計算すると、千九百カロリーだったかな。それをもとに計算すると「一人一日一万歩必要」だということになってます。ですから、「歩け、歩け」と言っても歩かないんです、正直なところね。徳島県民は「ちょっとスーパーに買い物行こうか」となったら車で行って買ってきたらすぐ車に乗る。バイクとか自転車も。そうじゃないんです。歩かないかんのですこれは。「歩こう」ということで、全県民に万歩計を配ります。で、それもデータが飛んでくるようなシステムをつくって、全県民がちゃんと一万歩歩いてるかどうか確認します。で、歩いてない人がおったらプルプルって震えて、「今日9千歩やから、あと1千歩歩かないかな」というふうな状態までの厳しい管理をして、一万歩歩いて。なぜこんなことを言うかというと、糖尿病が残念ながら平成20年から今までまた最下位。一時期、「みんなでつくろう！健康とくしま」で一回ドベからちょっと上がったのに、また最下位。お医者さんの数は全国トップクラス、福祉施設の数も全国でトップクラスなのに、これだけが徳島あかん。だからもう厳しくいきます。

さらに、「“全県民運動日”の制定」です。皆さん体育の日が定められているのは知っ

てると思います。だけど最近ね、私も子ども持って小学校行って、「体育の日、運動会やな」と。「何言よんな」と。運動会、春先になっとなです、最近。春になってるところもあります。運動会を10月10日にしてるかっていうと、してないんですね、最近。してないところが多いです。私の住む阿南市もなぜか6月とかそういったところに運動会があります。ですから、「運動しようよ」という日をこれも決めます。さっきの万歩計と同じで通達がブルブル来て、「ああ今日運動会やな」というようなことで、運動を促進します。敢えて促進します。それぐらいしないと、もう徳島県民はしません。はっきり言って。絶対せん。だからこれも強く施策として打ち出しています。

で、「今までののは青木さん、分析してないんちゃうん」と突っ込まれがちなんですが、分析は正直していません。分析はしません。なぜかという命を守る場所ですから。今、行っているのはすべて継続、で、付け加えて、さらに今打ち上げた提案を全てこれで盛り込めば、10年後、それは皆さんが確認していただければと思います。どうも御静聴ありがとうございました。

それでは皆さん、御意見、感想等よろしくお願いします。

(岡田委員)

これは個人的な意見なんですけど、突拍子のないものっていうことではすごくいいと思うんですけど、「県民なんとか」っていうのが多かったんですけど、個性が重視される時代になってきてる中で、「県民全部をこうする」という考え方が良いのか悪いのかっていうのは、僕も正直ちょっとわからないんですが、そういう題目の中で個別に、集落ごととか、そういうような取組がボトムアップで出てくるようなかたちがいいんじゃないかなと思いました。

(青木部会長)

ありがとうございました。ほか、御意見どうぞ。

(高木オブザーバー)

私たちの班のはまだ発表されてないんですけど、教育の面でこちらの方も、学校教育に取り込む“防災学”とか、大学の話も高等学校の話もあったんですけど、やっぱり子どもの頃からの教育っていうのが大事だということは、すべての政策について共通するのかなというふうに考えます。また私の班のところで発表はさせていただこうと思っ

てます。

(青木部会長)

わかりました。ありがとうございます。ほかないですか。

(村松委員)

防災とか、病気の予防とかについて、やっぱり対策っていうことでいうと、何かが起こったときにそれに対してどうこうというより、それが起こらないようにすることがやっぱり一番だなと改めて感じまして。本当に地震に関しては、数年前に東北の方で恐ろしい地震がありましたので、防災という意識が全国的に高まっていると思うんですけども、一方で、徳島であれば糖尿病のような、今も一日一万歩強制的に歩かせようみたいなことで、確かにそれぐらいの運動が必要なんだなと。自分も本当に歩かないですし、運動不足を実感する中で、何か医療的な部分とサービスというか、楽しいクリエイティブな業種を組み合わせ、なんかエクササイズみたいなことですけど、単純に医療の側面からではなくて、サービスとか娯楽の業種と一緒に、「気付いたら予防させちゃってた」みたいなことができたらいいかなと思いました。

(青木部会長)

ありがとうございました。これで3班は終わらせていただきます。よろしいですかね。ありがとうございました。

では、続いて4班、お願いいたします。

(川真田委員)

では、4班の発表をさせていただきたいと思います。メンバーはオブザーバーの板東さんと、新町川を守る会の川真田の2名です。

私たちのテーマなんですけれども、こちらにありますように「環境首都・先進とくしま」ということなんですけど、これまで発表していただいた3チームの皆さんが、新規性のある「こんなふうな事業をしてみたらいいんじゃないか」という提案が主だったかと思うんですけども、私たちが向けた視点というのが、中身はもちろん重要なんですけども、そもそも、「この行動計画って読まれてるのだろうか」というところがすごく疑問で、視点の中心もそちらになってます。

私自身も、この若者クリエイティブ部会の親会である「総合計画審議会」のメンバーでもあるんですけども、実はこういうレポートを書くにあたって、やっと全部をまんべんなく読んだという感じで、自分が関わっているところ以外はそんなに目を通したことがなかったので、それを「きっちり県民の皆さんに読んでもらうには、どうすればいいのか」というところで議論を進めていきました。

そういった視点で始まりましたので、まず「行動計画は誰が読むものなのか」ということ、次に「どのように読まれるべきものなのか」ということ、で、この二つを踏まえて、「どのように作られるのが望ましいのか」ということを中心にして考えてみました。

まず、「行動計画は誰が読むものなのか」というところなんですけど、これは広く「一般の県民の皆さん」ということになると思います。で、「どのように読まれるものなのか」というところなんですけど、これに関しては、県民の方が、「うちの県って何々については、どうなってるんだろう？これからどうしていくんだろう？」ということについて疑問に思われたときに、「徳島県の方針としては、どういうことを考えているのか」というのをこの冊子を手にとって確認をしてもらえたらいいのかなというふうに考えました。その結果、「どのように作られるのが望ましいのか」についてなんですけれども、探したい項目がすぐに見つかる。「医療であればここ」、「景気であればここ」というふうに、すぐに見つけられる見やすさで、誰にでも読みやすい文章であるということ、これを両立させることがすごく大事なのかなと考えています。

さらには、関連的な情報とか、専門的な情報、さっきの防災とかも多分、専門的な領域がすごく多くなってくると思うんですが、これへの「つなぎ」の役割も、この「いけるよ！徳島・行動計画」が果たせればいいのかと考えました。

そのような視点で行動計画、特に基本目標4「環境首都・先進とくしま」を読んでみて、二つアイデアを出しました。まず一つが、行動計画全体について共通して言えることとして、「こんなふうに改善すれば、もっと県民の方に読んでいただけるかな」ということ、もう一つが、私たちのテーマである、「環境について、特に顕著かなと思えるところ」についてのアイデアの二つを出してみました。

まず一つ目なんですけれども、行動計画全体を通して言えるのではないかということなんですけど、まずこの冊子なんですけれども、これが上下に分かれていて、すごくボリュームも多いです。内容が膨大で、一方では、「暮らし」とか「産業」、「地域社会」などの各分野には、それぞれの計画が策定されていて、個別の事業や目標もすべて記載を

されているということになっていますが、「どういった内容を県民の人に一番読んでもらいたくて」ということが考えられていれば、記載する内容も自ずと絞られてくるかなというふうに思いますし、「どういう視点で見てもらいたいのか」ということがあれば、切り分けるべき内容というのも自ずと見えてくるのかなと思います。

例えば、この「いけるよ！徳島・行動計画」は「結果目標」として、各分野の計画に「プロセス目標」を入れてはどうか、というのも一つ考えています。

次に、「長期ビジョン編・中期プラン編」に描かれている将来像の実現に向けた進捗管理というのは行われているのかな、というのも少し疑問に思っています。「目指すべき将来像」は、下巻の一番最後のところに文章で書かれているんですけども、行動計画編に計上された各事業の進捗管理というのは実施されていると思うんですけど、一番最後に書かれているところが本来は一番重要な目標であるはずなんですけど、それへの進捗管理というのは実はされているのかもしれないですけど、私たちが目に見えるかたちでは表されていないのかなというのは一つ思いました。例えばなんですけれども、「とくしま幸住人口」っていうのが出てくるんですけど、あまり議論の中であがったこともなかったと思うんですけど、「幸せに住む人口」と書いて「幸住人口」というのが下巻の171ページに太字になって出てきていると思います。「徳島に行ってみたい、住んでみたい、住んでよかったと感じる徳島のファンの人口」のことを「幸住人口」と言っているんだと思うんですけど、太字で示されているということは、県として重視していると考えられると思うんですけど、その「『幸住人口』増に向けたプランというものはあるのか」というとちょっと私たちの中では探すことができませんでした。ですので、探すことができなかったということは、多分目標値も策定されていないということなので、その辺がもう少し具体化されてもいいのかなと思います。

三つ目なんですけれども、行動計画は全部PDF化されて、県のホームページの中に掲載されています。ただ、冊子をそのままPDFにしたものなので、紙で読むか、ネットで読むかだけの違いになってしまっているんで、せっかくネットにあげたのであれば、リンクが飛ばすごく便利なんじゃないかなと思います。例えば、これはちょっと後ほどの説明になるんですけど、新しいページを増やさなくてもリンクの設定をするだけで、関連している項目に飛ぶことができるので、そうすれば、徳島県民の人ももっと気軽にネットで検索して、興味のあることを自分で調べることができるのかなと思います。で、WEBの特徴を活かして今PDF化している内容をもっとうまく県民の人に使ってもら

うということで、例えばですけれども、重点戦略1-1に「環境基本計画」というものがあります。で、「この計画ってどんな計画を立ててるのか」というのをリンク飛ばして、課のホームページに飛ぶ。重点戦略1-2に「高等教育機関との産学民官連携協働事業数」というのがあがっているんですが、個別事業の活動内容ですとか、連携した企業、学校のホームページにリンクが飛ばせば、もう少し興味・関心も深まるのかなと。次なんです、重点戦略1-4「電気自動車の充電スタンド設置数」ということで、「何箇所設置するか」ということは計画にも組まれているんですけれども、「どこに設置するのか」というところがわからないので、これをリンクを飛ばして、「こことここにあります」というのがわかると、電気自動車に乗ってる方は今すごく増えてると思いますので、便利がいいのかなというふうに思います。

それから、「行動計画編の各事業は県民の方に読みやすい工夫がなされているか」ということで、まず目標というのをよりインパクトのあるものとしてはどうかなと思いました。既存の目標も各課でたくさん議論されて厳選されたものを挙げられていると思うのですが、県民から見ると数字を挙げられるよりも、もっとインパクトのあるもので示された方が身近な感じがしていいのかなと考えました。例えば、「再生可能エネルギーの占める割合の増加」数、もしくは「天然のニホンウナギ」や、あと徳島にアユがよくいろんなところにいると思うんですけど、「アユの生息数増加」というものがどれくらいあったのかということ、インパクトのあるような目標の設定値にしてはどうかと思っています。

あと、目次があると、探したい情報にたどり着きやすいのかなと考えています。

ほかに、関連する事業はなるべくまとめて記載する。例えば、重点戦略4-2「生態系に配慮した野生鳥獣の適正管理」と、重点戦略4-3「農林水産物への鳥獣被害防止対策」に関しては、関連しているところがあるかと思いますので、調査・捕獲・活用のサイクルが一目でわかるようなページの配置をしてもらえると、もっとわかりやすいかなと考えました。

個別の数値というのもたくさん挙げられてると思うんですけど、それが果たして良好と言えるのか、それともよくない数字なのかの判別が難しいです。例えば、「情報公開度ランキング」、「人口一人当たりの宿泊者数」では全国順位を用いて、今、徳島県の実況がどうかっていうのを説明してもらってますが、環境分野というところでは、あまり他県と比べてどうかっていうところがほとんど記載はされていない状況です。なので、

他の項目と同じく、これも全国平均でどれくらいなのか、全国の中でどれくらいの水準なのかということ、数字で表してもらってもいいのかなと思いました。

あとは、ちょっと余談みたいになるんですが、事業を進めている責任の所在、どこの課がその事業を進めているのか。あと、もし可能であれば、列挙するときには、優先度とか緊急度というのを明確にわかるように記載してはどうかなというふうに考えています。

次のスライドなんですけれども、ちょっと細かい話にはなってしまうんですが、「長期ビジョン編」と「行動計画編」の中に、「ちょっと適応しない、不一致してるな」というようなところが見受けられるように思います。「長期ビジョン編」の方には、「木材から低コストでエタノールを製造する技術が確立し」というふうに文章で書かれているんですけれども、「行動計画編」の方には「木材から低コストでエタノールを製造する」というのに関連した事業は、今のところちょっと記載がされていません。で、同様なんですけれども、「徳島市内の美しい河川網と水辺景観は観光資源にまで成長」、「森林浴など癒しのエリアとして都市住民が積極的に活用」と書いてますが、観光の行動計画の方にも環境の行動計画の方にも、それに該当するような事業は今のところ見当たりません。で、「長期ビジョン編」に記載するということは、単に「2025年にそうなっているだろう」ということではなくて、「県としてその将来像を積極的に実現していこう」というものですので、「中期プラン編」、もしくは「行動計画編」にも、直接的な表現でなくてもいいので、何か関連する事業プランを盛り込んでいく方がいいのかなというふうに考えています。

最後に提案なんですけれども、「負の側面」、こういうところが良くない、糖尿病とかの徳島のよくないところというのはよく挙げられてると思うんですが、それを減少させるということも、県としての目標にはもちろんなり得ると考えてます。環境分野というのは、歴史的にも不法投棄とか土壌、あと新町川なんかもそうですが、水質汚染などの問題がどうしてもつきまとうような、ネガティブな側面が最近よく見られる分野だと思います。どんなに良い部分が多くても、わずかな悪い印象が残ることだけで、全体としてあまり良くないという評価を受けることもあります。ですので、こういった「負の部分」についての実態を明らかにするとともに、解消・改善させることも十分目標になり得ると考えています。

発表は以上です。

(青木部会長)

ありがとうございました。何か御意見を皆さん、よろしくお願いします。

(福島副部会長)

どんなふうに作っていったら見やすいか、わかりやすかったというのを、本当にきれいに整理してくださってすごいわかりやすかったです。最後のこの「負の側面」のところで、私、この間、学生とお話して、「徳島って水臭いよね」って言われて、「川とか臭いよね」って言われて、「えっ？」と感じて、私、全然気付かなくて、そんなことに。新町川を守る会の方々を中心に、本当にきれいにしてくださって、「水質すごい良くなったよ」というお話をしても、それでも「何かすごい臭いんだけど」というお話を何人かの学生にされてびっくりした覚えがあります。なので、本当にこうやって負のところというのは、もうちょっとちゃんと掘り下げて目標として設定するというのは本当に重要なことというふうに感じました。以上です。

(青木部会長)

ありがとうございます。ほか、御意見ございませんか。

(樋泉委員)

先ほどの班の発表でもあったように、「この行動計画自体が誰に読まれるのか」というところ視点でまとめてくださったというのは、よかったなと思いました。

(青木部会長)

ありがとうございます。ほか、御意見ございませんでしょうか。では最後に一言ずつ。

(板東オブザーバー)

私はかつて行動計画を作る担当になったことがありまして、その頃から、正直どうしたらいいのかなと思ってたところではあったんですけども、幸いにして、こういう若者クリエイト部会ということで意見を言わせていただける場に来たので、ここぞとばかりに言ってしまいました、というのが正直なところです。

要は、結局「皆さんに読んでもらいたい」ということがずっとありました。で、そのためにはどうしたらいいかっていうのが今回私たちのレポートになっていて、そういう

ふう理解していただければ幸いです。以上です。

(青木部会長)

では4班さん、どうもありがとうございました。

続いて5班さん、よろしく申し上げます。

(池添委員)

「みんなが主役・元気とくしま」ということで、分野としては福祉系の分野を担当しました。で、この福祉系の分野、少子高齢化と人口減少というものは、もう日本全体の今、社会的な一番の問題となっておりますが、地球温暖化と人口減少と少子高齢化というのは日本全体の問題ですので、かなり対策としては、国としてもとられてますし、一般的にこうしたらいんじゃないかなというのは、逆にいくらでも挙げられるなということが一番最初に話をしまして、その中でも徳島は何をしたらいいのかというようなことで、かなり徳島オリジナルな案を抽出してまとめています。

現状としては、もう皆さん知っているとおりの、人口が減ってきましたよということで、2007年を境に日本全国の人口が減っています。行政としての計画としては、人口が減ってきたということが本当にごく最近なので、今までの行政計画って、「何が何でも人口は今後それでも増えるんだ」という計画が、インフラにしても住宅にしてもかなり多かったですけれども、最近やっと人口が減ることを認めてですね、人口減少の対策を打ち出した、という歴史は、日本全国としてもすごく浅いと思っています。

で、徳島の現状なんですけれども、もう皆さん御存じのとおり、人口右肩下がりの、高齢化率右肩上がりというのが、地方都市特有の全国よりも早く進んでいるというような現状があって、下のグラフが全国、上が徳島県なんですけど、高齢化率は、徳島県の方が上ですと推移をしていますというところで、平成52年、2040年には高齢化率が40パーセントという予測がされているということです。特に過疎化が進む地方都市ということで、新聞にも取り上げられたことが、最近ですね。2014年5月8日には、「人口が減る自治体」として、徳島はかなり上位にたくさん入っていました、という背景があります。特に人口減少を見るときに、2040年の20歳から39歳の女性の数というのは何かというと、「子どもが生める人がどれだけ地方からいなくなるか」ということが重要視されているという現状があります。

で、少子化の背景としては、少子化だけを見ますと、やはり結婚しない男性、結婚しない女性が増えています。今から示すデータはすべて国の少子化白書とか、高齢社会白書とか、国のデータなので徳島県の現状ではないですけども、日本全国と多分徳島も一致しているということで、背景として挙げさせていただきます。生涯未婚率もどんどん右肩上がりというようなところで、平均初婚年齢と母親の平均出生時年齢もどんどん右肩上がりということが言えて、晩婚化と晩産化が進んでいるのが現状です。

ということで、私たちが考えた「目指すべき若者像」ということで、こちらは先に少子化の方なんですけど、実は行動計画の方の中身を見たところ、一般的に言われていることが並んでいるのかなというようなイメージで、特別に「徳島だから」というのはどれなのかなというのはいくわからなく、「男女の出会いの場」とかも全国的にされていますし、それだったら「徳島で目指すべき若者像」という、あるモデルをつくった方がいいんじゃないかなということで、最後にお示ししますけれども、「どういう生き方をしていくのか」というファミリープランのようなものを最後につくることを前提に、様々な政策、施策を考えました。

で、「若者像」としては、「幼少期からの一元的なファミリー教育」ということで、保健師の榊原さんが班にいらっしゃって、保健師の方で調査をされたところ、高校生とかだったら、「大学進学まではイメージできてるんだけども、その後の社会としてはどうしたらいいか、出産、子育てをどうするかみたいなことは全然想像できていないよ」というような調査結果があったということをお聞きして、「結婚、出産、子育て、すべて人生のライフプランをわかる、理解できるような教育」というのは、もう小学校から始めるべきではないのか、ということと、あとは、ヨーロッパなんかで、フランスとか北欧とかで出生率が上がってると言われてますけども、かなり「多様な家族の在り方」というのが認められています。婚外子とかもそうですし、そのほか働き方とか子育て環境も整っているということがありますので、そういうことも必要だと。で、教育の中では、高齢出産に伴うリスクをきちんと理解することで、冒頭でアンケート結果を出していただきましたけども、「20代後半ぐらいで結婚したいな」という願望があるんだったら、きっと30代とかで結婚することになりそうなので、「もうちょっと早く結婚して子どもを生んでおかないとだめなんだよ」という正しい教育を小学校からしていく。で、家族の在り方も、「いろんな家族の在り方があっていいんだよ」というようなことをしていく、ということを考えて、全体的に早期の結婚、出生率が向上するということにつな

がるのかなというふうに考えました。

ほかに背景としては、若年層の雇用をめぐる環境としては、これも社会的に言われていることですが、非正規の人が増えている。で、やっぱり非正規だと結婚できない、していない人が増えているという状況が実際にあります。で、既婚者の割合としては、収入が300万円を超すか超さないかで、「結婚できているか」というような境目になるというような調査結果も出されています。ただ、理想の子どもの数を結婚している人に聞くと、現実の数よりも理想が多いというようなことがありまして、「子育てとか教育にお金がかかりすぎるから」とか、「高齢で生むのが嫌だから」というような結果が出ています。実際に子育て世帯の年収を見てみますと、低所得者層に、これは青が1997年、赤が2007年なんですけど、年収がシフトしていった。「年収が低い世帯が子育てしているようになっていった」というようなところと、あと、また別の視点なんですけど、女性の就労を見てみますと、「育休を取ってる割合は増えている」んですけど、実は「育休前に子どもが生まれて退職している女性の数は減っていった」というような調査結果があります。

ということで、「目指すべき地域像」としては、「とくしま型のワークライフバランスモデルの確立」ということで、「所得が低いと子育てをしている」とか、「お金がないと子どもの数も生めない」というような背景があるので、やはり男性も女性も働けるようなワークライフバランスを確立しないといけないということから、育休、休暇制度が普及して、特に男性の育休なんかが一般的にならないといけないということで、具体的にはレポートの方に文章で書いてますので、言いたいことはそれにすべてまとまっているんですけど、時間がないので割愛しますのでまた読んでみてください。

で、男性の育休支援としては、今「男性が一回育休取ったら、もう一回取れますよ」という、男性が育休を取ることによって育休期間が延びるという特典というのが国の制度としてあるんですけども、それを更にプラスしたような、「男性が育休を取ったら、更に長い期間、育休の補助が出ます」みたいな政策をつくったらどうか、ということをも具体的に考えました。「男女問わず、子育てと仕事の両立が可能に！」ということを目指して。

で、次に、妊娠時に保育所を希望する人というのは全員希望をとって、妊娠発覚から育休取り終えて保育園に入るまでであると、1年半ぐらい必ず猶予があると思うので、その期間の間に保育所の整備は必ず行政にしてもらおう、というようなことを考えました。

実はこれ、スウェーデンとかではやってる自治体があります。

もう一つ、「就学サポート休暇の創設」ということで、実は子育てをしていたときの仕事を女性が辞めないといけない壁が、子どもが生まれたとき以外にもう一つありまして、小学校1年生に上がる時なんですけれども。保育園は長い間、子どもを見てくれるけれども、学童がなかったり、学童は短かったりとか、小学校に入るための準備のためにもうちょっと時間がほしいけれども、時間が取れない、育休期間は終わっているみたいなどころがありますので、「小1プロブレムを学校と家庭が協働してサポート」ということで、小1のときに育休とかを取れたりとか、ちょっと休暇が取れるようなことをしてはどうか、ということを考えてました。この二重丸のところは特に優先してする。で、星のところは、それ以外にもということはいくつか挙げています。例えば、「県下全域で学童保育が充実」、「子育て世帯が低価格な住宅の入居可能に」、「子育ての支援が受けやすい多世代同居世帯が増加」、「多世代同居世帯になったら特別な支援が受けられる」というようなことも考えました。

何せ子育て世帯はお金がかかりますし、男性も女性も育児に参加すべきだと考えているので、そのような地域であったり、そういう考えを持った若者を育てることが大事ではないかというふうに考えて、具体的な案を載せています。

で、高齢化なんですけれども、これは少子化とほとんど表裏一体なんですけど、特に高齢化としては、なぜ高齢化が起きているかということ、死亡率の低下というのが挙げられます。で、平均寿命が延びているということと、少子化が進行しているから高齢化が進んでいるというところがありますが、平均寿命だけでいくと、2060年になったら男の人は84歳、女の人は91歳まで生きるというふうに言われています。これは国のデータです。で、もう一つ大事なのが、「長生きする人が何歳まで健康であるのか」というところを見ても、健康寿命の延びと平均寿命の延びを比較すると、平均寿命の方が伸び率が高いんです。ということは、介護が必要な状態とか、何らかの医療的支援が必要な状況で長生きをしている高齢者の方が増えるということが予測をされています。

ということで、新しい徳島県の施策として考えたのが、「すだち（巣立ち）手帳の配布」です。「すだち（巣立ち）手帳」というのがどういうものかといいますと、高齢者自身の生活設計にどのような選択肢があるか、というのを事前に理解して、自らの高齢期を考えることができる社会を実現するために、年金の支給開始と一緒にすだち手帳を

配布する。そして、経済的状況とか、そのときの自分の状況とか、家族の状況、これからの住居の状況なんかを、65歳とか70歳とか、年金を受け取るときって、まだ多分元気だと思うので、「元気なときに、もう一度自分のファミリープランを自分で考えてみる」という機会を必ずつくるようにする。で、専門家とか、ケアマネさんであったりとか、保健師さんからもアドバイスを受けられるような機会もつくればいいのではないかと。

で、それと合わせてなんですが、「リビングウィル・エンディングノート」ということで、少しずつ考え方が広まっていますけれども、終末期をどのように考えるか、どのような死に方をするのか、ということ自分でこのすだち手帳の一部分にエンディングノートを書く場所を作りまして書いておいてもらう、ということをするので、無駄な医療費だったりとか、家族の負担を減らすということ、徳島県下一斉にしたらいいのではないかとということを考えました。

子どもが生まれたときの母子手帳は、全員に配布されて、ずっと持つことができるので、それと一緒に感じるように、高齢期の生活設計を考えるためにこれができるんじゃないかなというのと、本当に身体が弱ったときにどうするか、というのを考えると、なかなか新しいところに引っ越しとかしたとしても、地域でコミュニティがくれなかったりとか、本当に成り行き任せで、「移って、移って、移って」というようなことになりかねないので、自分自身で高齢期の生活を考えてもらう機会をつくってもらうというものです。

で、それ以外には、シニア世代の就労促進は、高齢者が自分の役割と生きがいを持って生活できるようなネットワークをつくるというようなことも考えています。

で、これ以外に「目指すべき地域像」として今挙げられるのが、介護を受けたい場所というのが、「自宅で介護してほしい」という人が、いつ調査してもだいたい一番になってます。で、虚弱化したとき、自分の身体が弱ったときにも、どこで居たいかっていうと、「自宅」というのが日本人は多くて、最期を迎えたい場所というのも「自宅」というのが圧倒的に多くなっています。

で、政府としても今、団塊の世代がもうすぐ後期高齢者になって、かなり介護保険の経済的な負担が増えるのではないかと、ということもありまして、「地域包括ケアシステム」ということを考えて、新しく施設をつくるのではなくて、家で居ながら、介護を受けながら最期を迎える、というようなプランに、どんどん国は変えていっています。

という国の背景がありまして、じゃあ、徳島県の「目指すべき地域像」がどのようなものかということ、やはり、超高齢社会に向けた高齢者の介護とか、認知症教育を小学校ぐらいから実施して、「地域の中に高齢者の方がいらっしゃるんだよ。認知症というのはこういうふうな病気で、こういうときにはこういうことをしたらいいんだよ」ということを教育で示してもらって、高齢者に心からやさしい街が実現する。これは他の地域でやってることもありますし、既に実施目標とかでもよく書かれているんですが、実際にどこまでできているのかということところは疑問なところなので、これは絶対に必要かなというふうに考えています。

で、あとのところは、家で介護を受けながら最期を迎えるということを考えると、24時間サービスは絶対に必要ですし、在宅医療も必要ですし、視察に行った「ほっとかない事業」も必要ですし、あとは、家のことになりますので、住める家でないといけないということなので、住宅改修とか住める家を整備するという、サービスと住める家を整備するというのが両方とも一緒になって整備しないといけない、ということと、最後に、「介護休暇制度」というのが「育児休暇制度」と一緒に、介護休暇制度の方が突然休まないといけないので、取るというときには現実厳しいことがいろいろあるんですけども、育休制度があって、男性も女性も仕事を休めるというような状況にしておいたら、介護が必要になったときにも、すぐに休めるのではないかとということで、育休と介護休暇、どちらもを推進していったらいいのかなというふうに考えています。

で、先ほど言いましたけども、こういう政策がもしあったとしたら、この徳島で生活する人は、どんな感じで生活することになるのかというモデルを考えました。例えば、家族としては、夫35歳、妻37歳、長男10歳、長女8歳、次男0歳という5人家族です。で、0歳の子が子どもとして生まれたときに、夫婦で育休を取って、男性しか取れない育休制度があるので夫婦で取る。で、母子手帳を受け取ったときに保育所申請してるので、保育所に行きたいとき、仕事復帰をするときに、どちらもさっと整っている。

子どもが小学校に入学すると、ファミリー教育が開始されて、学童保育も充実しています。で、小学校の時からこの生まれた子は、名前も考えたんですね。「かおる君」です。かおる君は、どういう家族にするか、というのを考えながら高校を出て、大学進学して、いつ結婚、子育てするぞ。そのためには仕事もどういう働き方をするぞ、というようなことを考えられるというふうになっています。

で、高齢者の方は、親が65歳になったときに、すだち手帳が配布されて、高齢期の

人生設計を考える。で、70歳ぐらいになると、リビングウィル・エンディングノートを考えるというような時期になって、そのとき息子は40歳ぐらいですが、シニア世代の意向を知ることができて、今後どういうふうに支えていったらいいのかというふうなことを考えるようになります。で、介護が必要になったときには、50歳ぐらいの一番働き盛りのときでも介護休暇制度が使えて、多様な働き方として、時短勤務とかそういうことも可能になっています。で、両親は自分の望む死に方ができて、本人もエンディングノートに沿って終末期を迎える、というような考えでモデルを考えました。

この福祉分野は、市町村が主に計画を立てるので、具体的な数字とかは市町村がまとめるとするんですけど、県としては、どういう方向性でいくのかとか、考え方とかをしっかりと示して、市町村がついてくるみたいな絵ができたらいいいのかなと思って、このモデルを考えました。以上です。

(青木部会長)

ありがとうございました。皆さん、何か御意見ございませんでしょうか。

(榊原オブザーバー)

私も保健師という分野で、高齢化対策っていうのは実際業務でも携わるところでもあるんですが、自分が今まさに子育て世代というところで、自分がこれからまた出産をしたら、どういう環境が整ってたらできるかなとか、これからも、子どもたちが大きくなって、どういう環境であればもっと生きやすい、家族を持ちやすい環境になるかなっていうのを想像しながら、いろんなアイデアが出てきたかなと思っています。

皆さんにも同じ世代として、もっといろんなアドバイスをいただけたらなと思いますので、教えてください。

(高木オブザーバー)

家族史というか、年表みたいなかたちで今回まとめたんですけど、これを作ることによって、自分の世代と次の世代である自分の子ども世代、また孫の世代に徳島県がどうなってほしいとか、具体的に想像できて、それをするためには何をすればいいかっていうような考え方で今回まとめることができた。こういうふうなかたちを取ることによって、自分の子ども世代とか孫世代の徳島県全体の姿を真剣に考えられる機会があったので非常によかったなと思います。

(青木部会長)

ありがとうございました。ほか何か御意見、これだけは言うとかないかんというのがありますかね。よろしいですか。それでは5班の皆さん、ありがとうございました。

続いて6班お願いいたします。

(福島副部会長)

そしたら、基本目標6の「まなびの邦・育みとくしま」ということについて、釋子さんと私が担当しているんですけども、残念ながら釋子さんは今日お休みですので、私から説明させていただきます。

時間が押すであろうことを想定してまいりまして、今日配っていただいている、この「グループ研究報告書」という冊子の37ページからはじめの方は、「現行の取組」ってどんなところに着目されてるのかっていうのを、「長期ビジョン」、「中期プラン」、「行動計画」に分けて、それぞれ我々の視点で読み解いてみました。で、それは38ページ、39ページに書いておりまして、40ページにまいりますと、「現状の課題」というので、私の普段行っております研究の中の一つの質問で、全国の全市区町村に対してアンケートを行ったんですけども、全員が回答してくださったわけではなくて、33.3パーセントの回答を得られております。

その中で、やっぱり人口減少とか高齢化とかっていうのは、かなり深刻な問題と捉えられてまして、それに対する対策というのも出されてはいると。なんですけど、実際に効果があったかどうかということとはまた別の問題、というような結果が得られておりますので、その一部をここに示しております。

次、41ページにまいりますと、人口減少・少子高齢化、あとは限界集落、そしてさらに消滅集落と言われてるような、そういった集落が存在しています、というところの、「どうして問題なのか」ということについて、我々なりに考えたところを書いております。

次、42ページにまいります。この42ページにつきましては、現在この「いけるよ！徳島・行動計画」の中の各項目につきまして、1番から5番までの枠組みの中で、それぞれがその中で、「今ってどんな課題があるんだろうか」というところについて、これも我々の視点でピックアップしております。こういった現状を踏まえまして、その次からは評価についても書いておりますが、これまでずっと書いてきております現状を踏ま

えて、じゃあ「着目したい項目は何か」とか、「特徴のある項目は何か」ということについて、現状の冊子に載っていることの枠組みではなくて、じゃあ「今って、どんなことが問題になってるかな」ということを6点挙げております。

で、こういう必要な項目と現状を踏まえて、じゃあ「将来あるべき姿」とか、「補充すべき施策」について、「どんなことが考えられるかな」ということを提案するというところを今日発表させていただこうと思っています。

はじめに、これまでもずっと発表の中にもあったように、絶対誰もがもう忘れないと思うんですけども、東日本大震災とか、ほかは経済的なことと言いますと、リーマンショックというところに端を発した不況というのを経験されてきています。

その中で、我々若者というのは現状の何を問題視して、何を不満に思って、何をよしとして、何を悪しとしているか、というようなところを踏まえた上で、「徳島の将来がどのようなものであるべきか」ということを考え、そのどうあるべきかっていうことに対して、じゃあ、「そのために取り組むこと」ってどんなことがあるかなっていうところの、この2点というのを提案をしていくというのを今回発表の趣旨とさせていただきます。なので、現状の分析等は、ここにお配りいただいている冊子で御確認いただけたらと思います。

で、その提案の中で、この2点に注目して、これから説明をしてまいるんですけど、各ライフステージを追って、幼稚園から、もっと小さいお子様からというのもあったんですけども、「教育・学び」というところに着目すると、小さいお子様は多分さっきの5班の方々がしてくださったと思いますので、幼稚園の子から次、まあ高齢者になって、じゃあ地域とか、そんなライフステージ関係なく、みんなどうするかということについて、ライフステージごとに説明をしてまいります。

まず、幼稚園・小学校の児童・生徒っていうのは、将来どんな姿であったらいいかなというのをちょっとイメージしますと、どんなかなって考えたら、「子どもらしいおもてなしの心を育ててくれたらいいな」と。徳島県民としてです。もちろんこの行動計画の中に書かれていることは大前提です。さっき青木部会長もおっしゃいましたが、これは大前提として、じゃあ「新たに何があるか」というところを提案しております。

で、「おもてなしの心」がどんなのかというと、何もへりくだって「どんどん来てください」と言って皆さんを持ち上げるというのではなくて、現状と同じなんですけれども、観光地を訪れると、全然知らない人に声をかけるのって最近危ないのかもしれない

んですけれども、元気よく挨拶をしてくださる小さい子っていうのが存在する地域もまだあるんですよ。私、この間、旅行行ったときにすごいたくさん挨拶してくれて、すごい気持ちよかったですね。で、そんなまちに徳島もなったらいいなと思ひまして、こういうところを提案しております。で、これは何かというと、おもてなしの心を持っていると、地域への愛着とか誇りっていうのも醸成できますし、徳島らしい子どもっていうのをみんなでつくりあげていくことができるかなと思っています。

次、2番目なんですけれども、子どもたちが最近地域と関わることっていうのがあまりないかなと。我々の時代よりも少なくなっているのかなと思ひましたので、「子どもたちが地域での遊びや活動に積極的に参加して、地域のことをよく知って郷土愛を育てている」と。そんな社会ができたらいいなと思ひます。

で、3点目は農林水産業。体験をしたことがあって、その楽しさとか苦労を知っていると。で、先ほどから農林水産業、岡田さんから御説明あったみたいに、「体験が大切よ」というところがあったかと思うんですが、本当にそのとおりで、教育においても“体験”というのはすごい重要なことだと思っています。なんです、ただただ楽しいということだけではこれまでと一緒かなと思ひますので、ちゃんと苦労も知ってもらって、それも含めて農林水産業だということを知ってもらえると、一番今後の生活にも役立っていくかなと思ひます。なので、「ああ今日楽しかったな」という一連の遊びの流れと同じようにではなくて、きちんと仕事として理解できるように“体験”をしてくれたらいいなというふうに思ひます。

で、じゃあそのために何をしたらいいかというと、幼稚園・小学校、県全体で、「みーんなで、おもてなし！会」を開催する。で、「おもてなしの心」について学んでそれを実践してみる。みんなでワークショップのように実践してみる、というようなことを、県内すべての幼稚園・小学校で開催する。

で、さらに、開催するとき、そこで教えてくれている先生だけでは大変なので、地域の人たちがそれをサポートして、みんなでこういった児童・生徒を育てていきたいと思います。

で、次、二つ目の施策は、「とくしまっ子！地域のお祭りスキスキ！」イベントの開催・環境の整備ということで、地域になかなか参加することができていないので、楽しむことができるような、子ども目線の何かイベントができたらいいなというようなところなんです。

で、次3番の「農業・林業・水産業！みーんなが知っているよ！徳島！」の開催を
てもらう。で、これは何かというと、現状でもお芋掘りとか、いろんなことを体験して
るかと思うんですが、それをもう本当に県内全体の幼稚園・小学校で実施してもらって、
また回数を増やすことによって、本当に自分たちがちゃんと育てて収穫まで、というこ
とができるようなイベントを開催してもらったらいかがかなというふうに思います。こ
れが幼稚園・小学校の児童・生徒たちの理想の姿と施策です。

で、次に、中学校・高校生、小学校の生徒も含めて、どんなことをしたらいいかとい
うと、一番はさっきと一緒に。「おもてなしの心を育てています」というところと、
あとは二番目が、「小中学生が地域貢献を実践するための知識を有し、活躍の場がある」
というところ。報告書の中のどこかに書いていますが、最近、若者って地域に貢献
したいとか、社会に貢献したいと思っているところが強いみたいなんです。で、そうい
ったところを実現させるためにも、やっぱり最近、そういった思いが強い以外にも、
NPOの方々の活躍の場がすごい広がってることもあって、そういったことを、どうい
うメカニズムになってそうなっているのか、とか、地域貢献するとどういった人たちに
どういふに役立っているのか、というのを、きちんとした知識として持っている、
次、自分がちゃんと働き出すっていうときに、そういったことも踏まえて、就職の選択
肢に入るといいますので、そういったことを知識として小学校から高校の間に学んでも
らって、で、さらに、就職する前、生徒とか学生とかをしてる間も活躍できるような場
を提供できたらいいなというふうに思います。

で、その下が、徳島にいながらにして「国際的に活躍する子どもたちが多く」という
ところで、国際的に活躍する子どもたちとか、徳島を飛び出しても心は徳島にあります
というように、国際的に活躍してくれる子どもがいたらいいなというふうに思います。

そのために何をしたらいいかという、まずは地域のことをちゃんと知って、おもて
なしの心を育ててほしいので、例えば、徳島市ですと「徳島市マイスター！」とか、三
好市ですと「三好市マイスター！」というふうに、「マイスター！」の認定を行うとと
もに、徳島県全体とすると、「とくしマイスター！」というふうに、これも「マイスタ
ー！」の認定をして、それに合格した人は自分の地域のことをもっと知って、いろん
な人に教えてあげられるというような自信が持てると思いますので、そういったマイスタ
ー認定を行っていくのはいかがかなと思いました。で、マイスター認定を行うんですが、
後に出てきますが、「マイスター！先生」というのがいまして、この「マイスター！先

生」はちょっと年齢が上ですので、この子たちに比べると。この「マイスター！先生」との交流も盛んで、世代を超えた交流ができるっていうところにも利点があります。

で、次、2点目なんですが、「地域貢献を実践するための知識を有し、活躍の場がある」というところに関する施策については、まず、『徳島！本気！職場体験！』の実施。これは何かというと、今って数時間だけ職場体験をしようと思うんですけども、それだけではなくて、何日間かにわたって職場体験をしてもらって、そこで実際にどんなお仕事があって、どんなふうに戻っていったのか、というのを体験してもらおう。これも県全体でやってもらおう。で、そのためにももちろん実施するのは、「じゃあしましょう」と言うと、どうにかしてくれるかもしれないんですが、受け入れの企業、団体が必要だと思いますので、その募集も同時に行っていくということが必要かなと思います。

で、それと合わせまして、次、『徳島の仕事のことまるわかり辞典』の制作・提供というところなんですが、一人の子どもがいくつもの職場に行くと、職場体験だけで一年が終わってしまいますので、多くの職業の映像とかテキストというのを制作して、それを見てもらったり読んでもらったりすることによって、いろんなことを知ってもらおう、地元の仕事のことを知ってもらえるっていうような、何かメニューを用意したらいいかなというふうに思います。

で、その下が、「東新町西新町・徳島の交流街」をつくり、盛り上げる。国際的に活躍する人材育成のために、日々そこに行くと英語でお話できる、他の言葉でお話できるというようなこと。で、他の国の文化も知ることができるというような交流会をつくれたらいいかなと思います。で、今、徳島県ではこの8月から牟岐町で「Tokushima英語村」をされるみたいで、すごい本当にいい取組だと思うんですが、スポット的ではなくて、常時こういうことを開催してくれたらその方がいいかなということで提案をしています。

その次が、特別支援学校の児童・生徒というのはどうかなということ、小学校から高校の児童の先ほどの提案に加えまして、それに上乗せして一つ、「個性を光らせ、自ら発信できている」未来だったらいいなというふうに考えました。で、これは何かというと、地域全体で特別支援学校のことを理解して、障がいのこともしっかりと理解して、障がいのある子どもたちのことも理解した上で、お互いの児童・生徒のことをお互いに認め合うということを前提にして、個性を活かして輝いていると。協働の取組もしているというような体制が整っていたらいいなというふうに思います。

で、そのために何をするかというと、以前、「徳島県人名鑑」みたいなものを作りませんかというようなお話をしたんですけれども、それと似たようなところで、「徳島の若者、この人！この取組！知ってね☆キャンペーン！」の実施ということで、これは何かというと、お互いのことをよく理解してるので、「ああ、この人にこういうことを聞いたら全部知っているよ」とか、「こういうこと得意よ」ということを認定をして、それぞれお互いに認め合って、協働の取組をどんどん行っていくと。で、人だけではなくて、こういう取組っていうのも、全部ピックアップしてやって、それを発信できるというようなシステムを構築するということが施策の提案です。

で、その次が、大学とか専門学校といった高等教育機関の学生に対してです。「将来あるべき姿」としては、まず一つ目、「自らが主役・主取組であることを認識し、それらを活かすことができている」ということが必要かなと思います。大学とか専門学校に行くと、学んでいることっていうのは、自分たちが本当に一番知っていることだと思います。もちろん先生から教えられてやってるっていう場合もあるんですが、それじゃなくて、しっかりと自分から取り組んでいる場合は、誰よりもそれを詳しく知っているという自負があるかと思いますので、そういったことを認識をきちんとして、で、それを地域に貢献するなり、自分の家族でも自分でも地域でもいいんですが、もうけに貢献するなり何なりしてもらったらいいかなと思います。

二番目は、「文系・理系の別なく、それぞれの学びに自信を持ち世界で活躍している」と。理系だろうが文系だろうが、そんなに大きくは違いはないと思います。それぞれのいいところがありますので、そういうところで自信を持って、世界で活躍してほしいなと思います。

で、そのために何をするかというと、「トクシマ若手専門家からの発信！みんなでトクシマSHOW！」っていうのを実施してほしいなと思います。これは何かというと、本当に研究に関する分野の発表については、自分でまとめて発表することになっていくんですが、そうではなくて、徳島ではどの分野でも一気に集まって、ディスカッションができるような場をつくってという。これをつくる上で、全部お膳立てするのではなくて、ちゃんと学生たちが一から創出できようサポートをするっていうぐらいで、あとは、コーディネートしたり、実際に運営したりするのは学生と。そうすると、そういう経験したことも、また次のステップに出たときに自信になりますので、こういうのをしましよというのを提案します。

次なんです、「働いている人・高齢者」、我々なんです、何をするかというと、「地域の大人が地元の市町村や徳島県をよく理解して、子どもたちにちゃんと伝えられる」ようにします。で、ほかには、「学びたいときに学びたいことを学びたいだけ学ぶことができている」。噛みそうですが、今なかなか勉強したいと思っても時間が取れない人もいます。なので、出て行くとなると大変なので、そういった中でも、どうにかして学ぶことができないかな、ということをおもって考えてみました。

そのために何をするかというと、「ちゃんと地域を理解しましょう、それを子どもに伝えましょう」ということについては、さっきの「徳島市マイスター！」とか、「とくしまマイスター！」みたいな子どもたちを育成すると。で、育成、何をするかというと、しっかりと教育、教えるということもするんですが、それ以外に問題の作成も行う。各分野の「マイスター！先生」をつくって、報告書に書いておられますけれども、「例えば」のところに、「吉野川の生態系・専門家お兄ちゃんマイスター！先生」というのは、吉野川の生態系を熟知して、「こんなお魚がいるよ」とか、「こういうところは気象・特性からこんなよ」というように、いろいろ教えられる。「他の国の類似した地域っていうのはこんなよ」というのを教えることができるような人たちを、人材育成ですよ、まあ自分たちで学んでもらうんですが、してもらいましょうと。そういったことをした上で、子どもたちに教えましょうというところの政策提案です。

で、その下が「『徳島学び発信BOX』の提供」と。県民の学びへのニーズっていうのは把握できているようで、できてないと思いますので、また、新たにどういうことを知りたいと思っているかっていうこともしっかりと調査した上で、そのニーズに応じた学びを提供できるようなシステムを構築していったらいいかなと。もちろんICTを生かして、こういったBOXの提供ができたらいいいかなという提案をしております。

最後に、「みんなは？地域社会は？」と書いてますが、これは地域全体とか、全体にこだわらず何をしたらいいかということ、先ほど糖尿病のお話も出てきましたけれども、「健康的な人であふれていて、みんなが地域社会と関わり、いきいきとした生活を送っていて、地域で取り組む・地域から学ぶ社会が実現できて、さらに、家庭教育充実のための環境整備ができている」と。で、このあたりは本当にいろんな分野と関連しています。それを実現するために何をするかというと、「健康やけん！」という宣言をします。「とくしまマラソン」とか「センチュリーラン」というのは、かなり有名になってきていますが、それらのイベントを強化して、さらに、団体の表彰制度とかを設けて、

ももっとも競うような環境を整えてあげる。そうするとみんなもっと入ってきて、みんなで取り組めるかなというふうに考えました。

で、その次が、「ネットの弊害、先進的に解決するけん！」というのをまず宣言して、それに係る教育を充実させましょうと。ニート・フリーターというのが増えてきていて、それが経済の衰退にもちょっとつながりつつありますし、ニート・フリーターになることによって、「お金が得られないので結婚する余裕がない」といったようなところも、いろんなところに弊害が出てきますので、その問題を解消するとともに、ネットを使いたいじめとか犯罪とかっていうのを抑制するために、本当にこの教育は大事だと思いますので、それをしてもらおうというような社会をつくっていかないとだめですね、という提案です。

で、次は、「地域が先生」というのをモチベーションに、地域が一丸となって教育をしていきたいと思います。「誰かが教育するわ」とか、「自分は教育とは関係ないわ」というような社会ではなくて、地域の子どもたち、地域の大人も含めて、みんなで一丸となって取り組んで育てていけるというような地域ができたらいいなと思います。

で、先程来お話もありましたが、「親世代がちゃんと親としてすべきこと」っていうのは、まだまだ今できてないのかもしれないかもしれません。しつけの問題も、学校に責任を押しつかけたりするような社会でもありますので、「どうして学校でこんな教育してくれなかったの」っていうのではなくて、ちゃんとお家で教育ができるように、親がどんな教育をしたらいいかというのを教えてくれるような地域であつたらいいなというふうに思いました。

ということで、何が言いたかったかということ、「徳島から徳島発で活躍できるような人材が育成できたらいいな」というふうに思っております。これは単独の取組ではありませんので、他の章のところも、本当に教育というのは重要だと思います。で、先程来、教育のことをたくさん皆さんおっしゃってましたので、他のところも併せて、持続可能で先進的な発展の一助となつたらいいかなというふうに思っております。以上でございます。

(青木部会長)

ありがとうございました。何か御意見ありましたら、皆さん。

私から言うと、まず「マイスター」ね、やっぱり。各分野におけるマイスターとい

う感じのイメージで受け取ったんですけども。そしてスライドにもあったんですけど、「徳島学び発信BOX」ともリンクして、社会人とかそういったのはそういうふうに取り組みすればなという印象を受けたのと、やっぱり各世代において「マイスター！」という認定というもの、それと「マイスター！先生」との交流というのが非常に良かったんじゃないかなと。

逆に、そういった先生とのやりとりというのも、教育という視点で良かったんじゃないかなというふうに感じておりました。ありがとうございました。

それでは、いよいよ最後、7班、よろしくお願いいたします。

(村松委員)

小原さん、島さん、樋泉さん、私の方で、「宝の島・創造とくしま」をまとめました。お手元にある資料の最後のところについてるページと同じなので、それをベースにお話させていただきます。

まず、私たちは「2050年の将来像」について考えてみました。2050年の日本がどうなってるかなっていうのを考えたときに、ちょっとネガティブなんですけど、地方では少子高齢化はピークを過ぎちゃっているぐらいかなと。で、大都市では、逆に高齢化が激しい。で、もしかしたら、日本全国で一部自治体が消滅している可能性なんかもあるんじゃないかな、というふうに想像しました。

で、2のところなんですけど、「2050年に目指す徳島像」っていうのはどんなかなっていうのを考えたときに、「世界のとくしま」、「自立循環型の経済」、「いろんな人が集まって多様性を容認できる徳島」、こんなふうになってたらいいんじゃないかなというのをちょっと想像しながら話をしていきました。

ページめくっていただいて、「それぞれのイメージ像」というところについてざっくり話をさせていただきますと、まず「世界のとくしまのイメージ」なんですけれども、書いてあるとおりなんですけれども、ざっくり言っちゃうと、「日本という国を知らなくても徳島は知っているぐらい」ということです。わかりやすくはそういうことです。

二番目のところの「自立循環型の経済のイメージ」も、「大都市に頼らない自立した徳島」、「徳島の中でお金が回っている」、「35年後もまちが継続していて持続可能な形」。

ここでちょっとポイントなのが、「自立した徳島」ということなんですけれども、「孤立はしていない」。で、「お金が回っている」ということは、生産、サービス、消費みた

いなことが、その中だけで完結してるというよりも、バランス良く経済の要素がその中に存在しているというイメージです。で、35年後もまちが継続、そのシステムが持続可能な形であったらいいなと思っております。

そして、「いろんな人が集まって多様性を容認できる徳島のイメージ」というのは、いろんなものごとが容認され、認められてうまくいっている。都会にいと、人はめっちゃくちゃいるんですけども、集まる人は似たような人ばかり。田舎にいと、人は少なくとも全員知ってるぐらいなんですけれども、どの人も結構いろいろ違った人たちがいと。そういう環境の中であれば、お互いに協力できたりですとか、支え合うことができる。それが、真の「風通しの良さ」ではないかと考えております。

そして、ここから行動計画の項目と照らし合わせながら、それぞれの要素を考えてみました。

最初、「誰もが幸福とくしまづくり」では、我々の目指すイメージのですね、「多様性を容認できる徳島」というところと一致してくるんじゃないかなと思います。実現のためには多様な文化や価値観を認めあう必要があろうかと思っています。先ほども出た単語なんですけども、人間関係の中の風通しの良さであったりですとか、他分野、他業種のことについて、いろいろ知れる機会をつくる必要があるんじゃないか。実体験を通してですね、「アーティスト・イン・レジデンス」のような外国の方と触れ合う機会なんかも、すごくいい機会だと思います。

で、スポーツとかアニメを通じた文化交流、さっきもお話の中にあっような「キッザニア」とかを挙げますと、大人のためにも「キッザニア」みたいなのがあってもいいんじゃないかなと思ったりしました。

そして、次のところが、「協働立県とくしまづくり」というところは、「自立循環型の経済」と近いかなと思います。ここに書いてあることは昨今すごく叫ばれているようなところで、官民が一体となって、官の方でできないところはNPOであったり、そういう民間の方にアウトソーシングというか委託してやっていこうということで、それはすごく必要だと思っています。と、同時に、もう出しちゃうばかりでもどうかなと思ってます。投げ出すのではないんですけれども、やっぱり民から行政の方がいろいろ吸収していただいて、やっぱり行政の立場でしかできないことは絶対にあると思うので、それを行政の立場でビジネスライクに実現していけたらと思っております。

そして次の「活力みなぎるとくしまづくり」というのは「世界のとくしま、自立循環

型の経済」という我々のイメージと近いかなと思っております。

で、実現のためには、「二拠点居住」の推進、「サテライトワーク」の推進ですね。それがなぜ重要かというと、「都会都会」だけでなく「地方地方」でもいいです。岡田さんの方から「地方と地方を結ぶ路線」みたいな話もあったんですけども、都会だけで成立している中で、それに乗っかっていくような形ではなくて、地方と地方が結びついて何かをしていくということもいいんじゃないかなということと、「遠い」ってことはそこに来るだけで、そこと何かやりとりをするだけで、ある種、行けばそれがアクティビティ的などころがあるというか、何か違うことがあるのかなと考えております。

で、サテライトワークというそのものは、環境を変えることの中で自由な発想を生み出す機会となっていくんじゃないのかなと。あるいは都会の中でも、オフィスという工場で働いているという環境から、もっとリラックスして人間的に創造性あふれる仕事ができるればいいんじゃないかなというふうな考えです。

そして、次の4番「笑顔あふれる徳島」というところは「世界のとくしま」。すごく大きいイメージなのであれなんですけれども、「実現のために、新しいかたちの徳島ならではのものを。地域ならではのものを守り、活かし、惹きつける」みたいなことを考えております。

で、ここの部分、私、個人的にも思った部分がありまして、例えば2050年、今から約35年後ですよ。そうするとだいたい日本の風景はガラッと変わるんじゃないかなと思っております。今までのことを思っても、今の建築物、住宅なんかだったら、一世代ぐらいで建て替えるような建物ですし、35年後そうなると思うんですけど、それがまた、50年後にできたものが、更にその50年後、100年後にはまた替わるということでは、あまり人を惹きつけ続ける魅力ではないのかなというふうに感じてます。ヨーロッパとかですと、何世紀と残ってる建物に対して人々は魅せられますし、我々もわざわざそこに行ってみたいと思うので。

ということであれば、是非35年後には、その後数世紀にわたって魅力を受け継ぎ続けられるような形が徳島の中で実現されたら、すばらしいことかなと思っております。その形というのは、森の中に溶け込んだ自然を生かした家であったりですとか、景観とすごくマッチした家、景観ですとか。あるいは機能面ですごくインフラと両立されているというふうな、いろんな側面があると思うんですけど、やっぱりその先に向かって輝き続けられる形となれば、ある種いかなるかたちでもいいのかなというふうに思っ

ます。

で、その後、数世紀先にも愛される形を今想像できる範囲で言えば、世界の方から愛されるような形であったりですとか、日本らしい四季の景観が守られている。で、初めて来たのに田舎に帰ってきたみたいな感じが得られるような街であったり、あるいは本当に新しい文化も取り入れられている。その中で、古いものが再度、故きを温ねる温故知新の世界ですね。そんなふうに考えております。

おおよそここまでのことがクリアーに設計されて、実現されていくのであれば、最後の「県民目線・県民参加による『県民主役の県政』の推進」という部分は、自然に実現されていくのではないかなと思っております。ただ現時点ですぐに始めていけるような部分としては、ソーシャルメディアのツールがあるのであれば、そういうのは積極的に使っていけば有効だと思われそうです。ただ、なかなかオープンな場所で発言したりとかするのはハードルが高いよというのであれば、最初の方にも言った、より風通しがいいような場を小さい場でもつくっていく必要があるのかなというふうに思っております。

あとまた、イベントとか、県民の側を盛り上げるためにやっていきたいよといった場合には、なかなか補助とかをするのに対していろいろな手続きだったりとか、いろいろなハードルがやっぱり多いのが現実だと思うんですけども、そこらへんを担当課がつくぐらい、申請の段階から行政の側がサポートしてくださって、一緒にできるようなことができていったらいいんじゃないのかなと考えました。以上です。

(青木部会長)

ありがとうございました。何か御意見ございませんでしょうか。それでは最後、一言ずつどうぞ。小原さん。

(小原オブザーバー)

私たちの班は、「宝の島・創造とくしま」ということで、すごくいろんな広いテーマだったので難しかったんですけど、やっぱり「宝の島」をつくっていこうというのは、未来志向ということで、今日いただいたアンケートなんかでも、徳島のイメージって「不便」、「地味」、「活気がない」というイメージでしたけど、これをなんとかして、ただ、「不便」というのはなかなか変えようがないと思うんですけど、大阪から新幹線が来たらいいですけど10年後には無理だろうということで、やっぱりその「活気がない」

というところを、「おもしろくて活気がある街」になんとかしていけたらなど。で、そのためには、行政だけではできないので、こういう協働、やっぱり活気がある場所というのは、すごく思いのある中心になる人がいて、その人と行政がうまくコラボできてるなと思うので、そういうのを、徳島はたくさん先進事例もあるので、どんどん進めていってほしいなと思います。

(青木部会長)

じゃあ、樋泉さん。

(樋泉委員)

「宝の島・創造とくしま」というお題で出させていただいたんですけども、やっぱり先のことなので、まずイメージをかなり先行させて、それでそれぞれのことを書かせていただいています。

この五つに共通するようなことなんですけど、やっぱりイメージである多様性というところを軸に考えていくと、すごいすんなりとした答えが出てくるのかなと思いますし、可能性を感じました。

(青木部会長)

村松さん、何か言い残したことはないですか。最後の最後です。

(村松委員)

矛盾しているような部分があったんですけども、サテライトワークのことで、「大都市に頼らない自立した徳島」っていいながら、サテライトワーク、あくまで「都市の衛星」的なことを言っているんですけども、一番最初のグループの発表の中で、コンサートの話を聞きまして、5千人ぐらいしか入れないところだからこそ、わざわざ都会の方からファンがやってくるみたいなの。

ですから、やっぱり徳島だけでは弱い部分もあると思うんですけど、関西圏だったり、関東圏と一緒に組むことによって、彼らのないところを補完できたりとか、というところは必ずあると思うので、そういった意味で、単純に都会から仕事をするだけの場というところじゃなくて、それをさらに、都会の仕事場ではできない強みを新しく生み出せるような場として思っておりますので、やっぱりこのサテライトワークというのは、い

ろんなことを積み上げていく最初の段階としてはすごく有効なのかなと思いましたが、そういういいステップを踏んでやっていけたらいいなと思っております。

(青木部会長)

ありがとうございました。以上で全部のグループの発表が終わりました。本当に皆さん、お忙しい中、作成から打ち合わせ等も御苦労様でございました。以上で研究発表は終了したいと思います。それではこのあたりで意見交換会を終了したいと思います。本日研究発表の内容のほかに、皆様から出された御意見については、若者の視点、若者世代の意見として、新たな総合計画の策定に生かしていただきたいと思っております。

でまた今後、次ですね、次回の部会運営についてですが、今年度はクリエイト部会、計画策定作業を最優先とし、可能な限り協力をしていこうということを考えておりますので、従いまして、次回の部会の開催につきましては、作業の進捗状況を勘案しながら事務局と調整させていただきたいと考えておりますが、皆さんよろしいでしょうか、それで。いやいやそうじゃなくて、こうしてほしいという意見が何かあれば。

今年はどうしても、皆さん研究していただいた行動計画が改定をする時期に来てますので、どうしてもこれを優先せざるを得ないかなと思っておりますので、なにとぞ御協力をよろしくお願いしたいと考えております。皆さんよろしいですかね。岡田さん。

(岡田委員)

今回、皆さんすごく頑張ってレポートを作ったわけじゃないですか。じゃあその次のステップとして、県の方から、例えばこれだったら可能性はあるが、これはだめだねというような次のステップが僕はほしいと思うんですよ。だから、逆に県の方から、これだったら可能性はありますという、入れられるもの、入れられないものを分別していただいて、それで次の議論をしたいなと、例えば。

(青木部会長)

これは是非、事務局の方へ上げて、クリエイト部会の意見として提出して、調整をさせていただこうかなと思っております。

(岡田委員)

例えば、「こういうかたちだったら入れられる」とか、そういう次のステップの議論

ができれば、この議論が生きるというか。これで「親会に全部つぶされました」っていったらそれで終わりなので。

(青木部会長)

それはおっしゃるとおりだと思いますので。わかりました。貴重な御意見ありがとうございます。是非それは事務局の方で御検討いただければと思います。よろしく願いいたします。

それから最後にですね、すでに御案内のとおりですね、部会の活動ではないですが、昨年の「とくしま若者L.E.D.教室」に引き続いて、8月30日に「とくぎんトモニプラザ」で開催される、「徳島若者未来創造塾」の意見交換について、我々委員が参加し、大学生の皆さんと、徳島の未来像について意見交換会をすることになっておりますので、それで今日せっかく、県民環境部こども未来・青少年課の小西さんがおいでですので、1分だけ小西さん、御説明いただけますか。

(こども未来・青少年課 小西主任主事)

「徳島若者未来創造塾」のテーマは先ほどから出てる「体験」です。あとは、人とのつながりを深めていただいて、今、皆さんがやっていたような議論をやっていたくための基本の種を育てたいなというところです。

皆さんよりも一回りぐらい下の、二十歳前後の方が多いです。今日で締切なんですけど、今のところ二十数名来ており実施することとしております。

日付は8月30日、土曜日です。時間は15時から17時ぐらいまでだと思います。今日はもう時間がないので、改めて皆さんにメールを差し上げますので、どうしても無理という方以外は積極的に参加していただきたいなと思いますので、よろしく願いいたします。以上です。

(青木部会長)

ありがとうございました。委員の皆さん、是非とも御協力よろしくお願いします。最後に事務局から何かございますか。

(事務局)

長時間にわたり、ありがとうございました。諸準備も含めまして、皆さんには、作業、

大変御苦勞様でした。先ほどの反映できる・できないという部分も含め事務局の方で整理させていただきたいと思います。

また、議事録の発言ですが、お名前も入れて公開したいと思いますので、よろしくお願ひします。

(青木部会長)

議事録についてはそれでよろしいですかね。それではそのようにさせていただきます。

それでは、長時間にわたり、もう今日15時から18時過ぎるという、若者クリエイト部会初の長時間にわたり、議事に皆さん御協力いただきまして、どうもありがとうございました。以上で終了いたします、ありがとうございます。

(以上)